國立臺灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature
College of Liberal Arts
National Taiwan University

Master Thesis

存在様態のシテイル文について
—格体制変更の現象から—

A Study of Existence Usages of *-teiru*
—From an Aspect of Case Structure—

江宛軒

Wan-Hsuan Chiang

指導教授：林慧君 博士

Advisor: Hui-Chun Lin, Ph.D.

中華民國 106 年 6 月

June 2017

doi:10.6342/NTU201703274

誌謝

這篇論文能夠完成，首先在過程中最功不可沒的，絕對是我的指導老師林慧君老師。不管是在學習過程中不遺餘力的傾囊相授，抑或是在生活的大小事情上，教導我處世待人的技巧，甚至是在整個碩士生涯中的低谷，老師永遠都站在我這邊，沒有慧君老師，這篇論文便無法以現在的樣貌呈現在大家面前。另外也要感謝前後擔任我口試委員的住田哲郎老師、林清樺老師，還有王世和老師、陳昭心老師。雖然最後無法繼續麻煩兩位老師，住田老師和林清樺老師在提案審查時仍給予了我十分有用的意見，使我在撰寫論文時能更有方向。而王世和老師自大學時代即是自己語言學啓蒙的恩師，在最終審查的時候也給予我十分重要的意見，及告誡我最後修改時需要留意的地方；陳昭心老師則是非常用心的回應的我論文的觀點，並提出許多重要問題。兩位老師都在最終審查時給予我最大限度的鼓勵，在此獻上我誠摯的謝意。

接著我想感謝我親愛的家人。在撰寫論文的過程中，我常常無法扮演一個好女兒、好孫女、好姪女、好姊姊的身份，他們是最常直接承受我的不安與焦躁的人，卻也是我最大的後盾以及避風港。感謝媽媽願意耐心的等待我完成這項任務，媽媽一直都是最關心我進度的人，但不成熟如我，卻常常以不耐來衝撞這份關心，但要是沒有媽媽的關心與支持，我必然無法熬過漫長的寫作過程。而爸爸的關心相較起來常是默默無聲的，但同樣也是我最堅強的後台。還有其他家人們的支持，我無法一一細說，但請容許我以微薄的言辭，來感謝你們的付出。

最後我想感謝同窗的婉菱及可歆兩位好夥伴。你們總是不吝嗇的付出你們的時間來陪伴我，不管是學術上的討論，還是生活中點滴的分享，都使我獲益良多，感謝你們溫暖的陪伴。雖然未來我們即將踏上不同的人生旅程，但我希望我們都會好好的！另外也要特別感謝遠在日本的麻子軒學長，感謝學長在我旅日期間照顧我，更在論文撰寫上給了我很多建議，謝謝學長！此外，研究所其他成員，學長姐，學弟妹，系辦人員，還有很多很多人，都在不同的地方給了我支持，我無法一一感謝，在此請允許我一併向你們獻上感謝與祝福。

碩士生涯一路走來，或許不如其它人平順安穩，但在這裡我敢說，至今我沒有一絲後悔。感謝所有人在過程中的付出，最後我想對自己說：謝謝你，一直都沒有放棄！

江宛軒　謹誌於臺灣大學

中華民國一零六年八月十四日

doi:10.6342/NTU201703274

存在樣態的「シテイル」
—「從格體制變更」現象出發—

摘要

在現行的研究中，大多以「動作持續」，或「結果存續」的觀點，來討論日文中「シテイル」形式所表達的動詞動貌。但在福嶋(2004)的研究中，發現藉由將原本不自然的句子「池に鯉が泳いだ」中「泳いだ」改為「泳いでいる」，「池に鯉が泳いでいる」不僅將成為自然的句子，更提升了對助詞「ニ」格的容忍度。福嶋認為，這種改變動詞格體制的「シテイル」形式，就是野村(2003)研究中所指的「表現存在樣態的シテイル」。本研究將運用野村(2003)的觀點，論述福嶋(2004)中，改變動詞格體制的「シテイル」形式，對整體句構所造成的變化，與其代表的意義，並從語料庫中收集文例並分析，從名詞面、動詞面等不同的面向，來討論並歸納這種由改變動詞格體制的「シテイル」形式所構成的句子之特徵。

本研究的結論為以下三點：(i) 在由改變動詞格體制的「シテイル」形式所構成的句子中，「ニ」格代表的是「存在場所」而非「動作場所」或「結果存續的場所」。也就是說，藉由改變動詞的格體制，將句子「存在的靜態面」前景化，「シテイル」形式表達了主體的「存在樣態」，而非主體動作的持續或結果存續，句子在整體文章段落中的功能傾向描述景色的靜態用法。(ii) 透過文例分析，並運用 Silverstein 名詞句階層的概念，能夠發現階層中位置越低的名詞，如動物名詞或無生物名詞，越容易出現在該種句構中。由此可推論，階層中位置越低的名詞，其生物性(活動性)較低，越容易成為靜態景色描述的對象，因此能夠出現在靜態的景色描述中。(iii) 觀察文例，能夠發現在「シテイル」形式分別代表「動

doi:10.6342/NTU201703274

作持續」及「結果存續」時，出現在該句構動詞傾向的不同。「シテイル」形式為「動作持續」時，其出現動詞多為「樣態性移動動詞」，此時透過改變動詞的格體制，可將句子的動作動態面背景化，引出句子的存在靜態面。而「シテイル」形式為「結果存續」時，其出現動詞多為「瞬間動詞」，此時透過改變動詞的格體制，可強調句子靜態的結果存續面。

關鍵詞：格體制、格體制變更、存在樣態、*-teiru*、名詞句階層、連語論

doi:10.6342/NTU201703274

A Study of Existence Usages of *-teiru*
—From an Aspect of Case Structure—

Abstract

Among recent studies, an suffix in the form of "*-teiru* " in Japanese is often discussed from aspects of "continuation of action" or "lasting existence of outcome." However, Fukushima (2004) found that the ungrammatical sentence * 池に鯉が泳いだ becomes grammatical if 泳いだ in the sentence is replaced by 泳いでいる. Sentence 池に鯉が泳いでいる becomes not only grammatical, tolerance to case particle "*ni* " is also enhanced. Fukushima suggested that form *-teiru*, which changes case of a verb, is exactly the form *-teiru* discussed in study of Nomura (2003), which functions by showing the existence of a subject by portending the situation of that subject. This study will demonstrate overall transformation of syntactical construction and semantic difference once case particle *-teiru* of a verb changed. The data was collected from corpus and analyzed from three different aspects, namely noun, verb and other grammatical aspect. The discussion on concluding the feature of case *-teiru* transformed sentence will also be included.

The three main conclusion of this study are as follows: (i) in a verbal case changing particle *-teiru* constructed sentence, case particle "*ni* " marks "place of existence," but not "place of action" or "place of lasting outcome," which means the change of case foregrounds the "existing static situation" of a sentence. Form *-teiru* expresses the "existence" of a subject, but the continuation or lasting

doi:10.6342/NTU201703274

outcome of the action of a subject. The sentence tends to play the role of describing static situation in the overall passage. (ii) After analyzing data by adapting the noun hierarchy of Silverstein, the outcome shows that the lower the noun in the hierarchy, e.g. animal nouns, inanimate nouns, the more frequent the noun exists in discussed -*teiru* sentences. In conclusion, the lower the noun in the hierarchy, the less animate (active) the noun is, therefore, the easier it appears in the discussed -*teiru* sentences. (iii) If the form -*teiru* indicates "continuation of action" or "lasting existence of outcome," a tendency was found among verbs in the sentence. When -*teiru* indicates "continuation of action," verbs in the sentence tend to be "progressive." By changing the case of the verb, the action in the sentence tends to be changed into description of statics. If form -*teiru* indicates "lasting existence of outcome," the verbs in the sentences tend to be "instantaneous," by changing the case of the verb, the lasting existence of the outcome described is emphasized.

Keywords: case structure, aspect of case structure, existing static situation, form – *teiru*, Noun-Phrase Hierarchy, Theory of Collocation

doi:10.6342/NTU201703274

存在様態のシテイル文について
—格体制変更の現象から—

要旨

動詞のアスペクト的形式としてのシテイル形式に関しては、奥田(1977)をはじめ、主に「動作継続」と「結果継続」という二つのアスペクト的意味に重点が置かれ研究されてきた。その一方、杉本をはじめ、それまでのアスペクトの観点に反し、シテイル文は実は存在文の一種に属しているという観点からシテイル形式を捉え、全体述語としてのシテイル形式は存在詞的な側面を持っていると指摘した。福嶋は以上の観点を踏まえ、さらに福嶋(2006)では「*池に鯉が泳いだ。／池に鯉が泳いでいる。」という例文から、動詞をシテイル形式に変更すると同時に、動詞の格体制にないニ格句を新たに出現させている、という現象を発見し、こういうシテイル形式は、実は野村(2003)が提唱した「存在様態を表すシテイル」とは一致していると示唆した。しかし、福嶋(2006)では語順の観点のみで調査を進み、その語順に従っても言語事実に反する例は、実は存在している。さらに、調査対象の動詞が少ないため、より包括的に当現象を分析するには、さらなる広い観点から考察する必要がある。

本研究は上述した福嶋が提出するシテイル文を「格体制を変更させる存在様態文」とし、文の全体構成、名詞、そして動詞の側面から、分析を行った。結論を以下の 3 点にまとめることができる:(i)「格体制を変更させる存在様態文」におけるニ格は存在的な用法であり、動作の様態と主体の「存在場所」を表している。「格体制を変更させる」というプロセスを通し、ニ格の静態的存在性を取り入れることで、存在的静態面を前景化すると考えることが可能である。

doi:10.6342/NTU201703274

(ii) 実例分析と Silverstein(1976)「名詞句階層」の概念を通して、「格体制を変更させる存在様態文」のガ格名詞は動物名詞、無生物名詞など、階層の中で比較的低い階層に属する名詞であると分かる。そして階層が低ければ低いほど、「静止的な風景描写」の対象として描写されやすい。(iii) 動作継続文による「格体制を変更させる存在様態文」内で使用される動詞には「様態性の移動動詞」が多く、そして「格体制を変更させる」というプロセスを通して、本来「動作継続文の動態面」が背景化され、「存在様態文」の「存在的静止面」が前景化された。一方、結果継続文による「格体制を変更させる存在様態文」内で使用される動詞には「瞬間動詞」が多く、「格体制を変更させる」というプロセスを通して、その結果の存続が強調された。

キーワード：格体制、格体制変更、存在様態、シテイル形式、名詞句階層、連語論

doi:10.6342/NTU201703274

目次

口試委員會審定書 i

誌謝 ii

中文摘要 iii

英文摘要 v

日文摘要 vii

目次 ix

第 1 章　序論 1

1.1　研究動機及び目的 1

1.2　研究対象と研究方法 4

1.3　本論文の構成 5

第 2 章　先行研究 7

2.1　杉本(1988)の研究 7

2.2　岡(1999)の存在構文に基づくテイル・テアル構文 9

2.3　野村(2003)の存在様態を表すシテイル 11

2.4　福嶋(2004)の「格体制を変更させる」シテイル文 14

2.4.1　福嶋(2004,2006)の考察 15

2.4.2　福嶋(2006)の問題点 16

第３章　実例調査 19

3.1　調査方法 19

doi:10.6342/NTU201703274

3.2　調査対象—「格体制を変更させる存在様態文」 20
3.2.1　ニ格の存在的用法 21
3.2.1.1　モノの存在場所を表すニ格 21
3.2.1.2　認知言語学から見る存在的なニ格 22
3.2.1.3　「格体制を変更させる存在様態文」における「存在的な静態面」 24
3.2.2　「N1 ニ N2 ガ V テイル」における N1 と N2 の制約 25
3.2.3　まとめ 28
3.3　調査結果 29
第 4 章　名詞の側面から見る「格体制を変更させる存在様態文」 35
4.1　ガ格名詞の特徴 36
4.1.1　名詞句階層から見るガ格名詞 37
4.1.2　ガ格名詞の生物性 40
4.2　中立叙述の「ガ」格による名詞の背景化 43
4.3　まとめ 45
第 5 章　動詞の側面から見る「格体制を変更させる存在様態文」 47
5.1 福嶋(2004)における手がかりと問題点 47
5.2　動詞の傾向 49
5.2.1　自動詞に偏る動詞傾向 49
5.2.2　自他動詞の違い一主体・客体の観点からの動詞分類 52
5.3　動作継続文における「格体制を変更させる存在様態文」 54
5.3.1　連語論における移動性を表す自動詞 57
5.3.2　移動動詞における様態性 59
5.4　結果継続文における「格体制を変更させる存在様態文」 63

doi:10.6342/NTU201703274

5.4.1　「瞬間動詞+シテイル」動詞文のアスペクト的意味 66

5.4.2　「結果の存続」を表す「格体制を変更させる存在様態文」 67

5.5　まとめ 70

第 6 章　結論と今後の課題 72

6.1　本論文のまとめ 72

6.2　今後の課題 75

参考文献　(五十音順) 76

doi:10.6342/NTU201703274

第 1 章　序論

1.1　研究動機及び目的

動詞のアスペクト的形式としてのシテイル形式に関しては、奥田(1977)をはじめ、主に「動作継続」と「結果継続」という二つのアスペクト的意味に重点が置かれ研究されてきた。それと同時に、多くの学者によってシテイル形式が表すさらに細かいアスペクト的意味も提唱されてきた。

その一方、杉本(1988)は、それまでのアスペクトの観点に反して、シテイル形式は二つの意味を持つ多義語という観点から、シテイル形式が表す意味についてまとめた。さらに、岡(1999)、野村(2003)は、シテイル文は実は存在文の一種に属しているという観点からシテイル形式を捉え、全体述語としてのシテイル形式は存在詞的な側面を持っていると指摘した。

この指摘に関し、福嶋(2006)は以下のような問題を提起することにより、実例をもって野村氏の説が正しいことを証明した。これはシテイル形式の研究における、大きな発見であった(福嶋 2006：99)。

(1)*　池に鯉が泳いだ。／○　池に鯉が泳いでいる。　[動作継続]

(2)*　庭に犬が死んだ。／○　庭に犬が死んでいる。　[結果継続]

動詞をシテイル形式に変更すると同時に、動詞の格体制にないニ格句を新たに出現させている。このように、新たに[場所]ニ格句を出現させるシテイル形式を、福嶋(2006)は「格体制を変更させている～テイル」と呼んでいる。

doi:10.6342/NTU201703274

福嶋(2006)の調査によると、シテイル形式が格体制を変更させる現象は、シテイル形式のアスペクト的意味が、動作継続と結果継続の両方を表している場合においても出現しており、従来のアスペクトからの観点では、出現させる条件としては解釈できない。そして語順「N1 ニ N2 ガ V テイル」[1]に着目すると、「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっている文は、いわゆる存在文と一致することから、このようなシテイル形式は、実は野村氏が提唱した「存在様態を表すシテイル形式」と同じようなものではないかと、福嶋は指摘した。

ところがこのような「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっている例(3)のようなシテイル文を、福嶋が提示した「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順に従って、以下例(4)のように変えると不自然な文となる。

(3)○　池に鯉が泳いでいる。

(4)*　プールに子供が泳いでいる。

例(4)は、福嶋が言うように存在様態文と同じ語順であるが、不自然な文である。このことから、語順の観点からだけでは説明し難いということが明らかである。

さらに、福嶋(2006)では、そのような新たにニ格を出現させるシテイル形式を「格体制を変更させている～テイル」と呼び、それが野村(2003)の提示した「存在様態を表すシテイル形式」と一致していると指摘し、語順の観点のみで「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっている文と「存在様態を表すシテイル」文との関連性を述べた。しかし、「格体制を変更させている～テイル」

[1] 福嶋(2006)には「～ニ～ガ～テイル」と記述しているが、本論ではよりはっきり討論するために、「N1 ニ N2 ガ V テイル」と記すようにする。

doi:10.6342/NTU201703274

現象が起こっている文が「存在様態を表すシテイル」文と、どのような文法的な特徴で関連しているかに関しては明言していない。なお、福嶋(2006)は主に、「歩ク」「休ム」「泳グ」「死ヌ」の四種の動詞を用いて[2]考察を行ったのであるが、これでは、研究対象とした動詞の少なさは否めない。より包括的に「格体制を変更させている～テイル」現象について議論するには、さらに多くの動詞を対象として考察する必要があると思われる。また、動詞を限定して調査することにより、どのような動詞が「格体制を変更させている～テイル」現象を起こしやすいか、さらに広い観点から、「格体制を変更させている～テイル」現象について考察を行いたい。

したがって、本論文では「格体制を変更させている～テイル」現象をより明らかにするため、まずは野村(2003)が言及した「存在様態を表すシテイル」の特徴について説明したい。次に「格体制を変更させている～テイル」現象は、どのように野村(2003)の「存在様態を表すシテイル」と関わっているか、福嶋の論説の中で明らかにされていない部分についても討論したい。

また、福嶋(2004,2006)が提示した手がかりをもとに、他のデータベースを使い改めて考察し、実例分析を通し「格体制を変更させている～テイル」現象を解明したい。具体的には、このような「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっている文が有する構文全体での特徴を解明したい。また、従来のように動詞の側面から考察するだけでなく、どのような名詞がその対象になりやすいのかという名詞の側面からの考察も行いたい。これらから、「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっている文に関し、更なる議論を進めたい。

[2] 福嶋(2006)は、「歩ク」「休ム」「泳グ」「死ヌ」「固マル」「濡レル」「待ツ」の七種の動詞について調査をしたと述べているが、調査結果を開示したのは「歩ク」「休ム」「泳グ」「死ヌ」の四種の動詞のみである。「固マル」「濡レル」「待ツ」については、用例を採集したと記されているが、同論文内では詳しい調査結果は述べられていない。

doi:10.6342/NTU201703274

1.2　研究対象と研究方法

本論文では、主に福嶋(2006)が提出した「格体制を変更させている～テイル」現象を含む文を分析対象とする。福嶋は「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっているシテイル文は、野村(2003)の提示した「存在様態を表すシテイル文」とは同じようなものであると指摘したが、野村(2003)の解釈から見ると、「裏庭に人が三人立っている(野村 2003：3)」「かどに車が止まっている(野村 2003：3)」など、「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっていないシテイル文も「存在様態を表すシテイル文」に属する。従い、福嶋が提出した「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっているシテイル文は、実は野村(2003)の言う「存在様態を表すシテイル文」の一種であり、野村が提唱した「シテイル形式の存在様態性」を表していると、本論の仮説である。本論ではその「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっているシテイル文が、野村(2003)の「存在様態性」との関連性について論じたい。野村(2003)は、シテイル文を存在文の一種という観点から考察を行い、シテイル形式の存在様態性について議論を進めた(野村 2003：2-7)。つまり、従来の「動作継続」と「結果継続」以外に、シテイル形式は「存在様態」を表すアスペクト的意味も有しているということを提唱したのである。

ゆえに、第 2 章からは福嶋が提示した「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっている文を、「格体制を変更させる存在様態文」として一括し、「格体制を変更させる存在様態文」と野村が言及した「存在様態性」との関連性について論じたい。そして、シテイル形式が「格体制を変更させる」というプロ

doi:10.6342/NTU201703274

セスを通し、いかにして存在様態を表すかについての論を展開したい。

本論文では、福嶋(2006)の提示した「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順に基づき、データベースから多分野に渡る実例を収集し、それらの分析を通して「格体制を変更させる存在様態文」の特徴を観察してまとめる。そして、様々な観点から、「格体制を変更させる存在様態文」にはどのような特徴があるのかを明らかにしたい。

また、本論文中の例文は、主に国立国語研究所開発の KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)『中納言』」データベースの「現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版」、または先行研究内から引用したものである。

1.3　本論文の構成

本論文では以下のように、全 6 章に分けて「格体制を変更させる存在様態文」について論じていく。

第 1 章では、本論文の研究動機、研究対象、及び研究方法について述べる。

第 2 章では、先行研究を熟考し、問題点を検討する。まずは「存在様態を表すシテイル形式」についての先行研究を振り返ってみる。さらに、主として福嶋(2004,2006)の指摘を手がかりに、その問題点について検討する。

第 3 章では、先行研究で提唱された概念を踏まえ、まずは「格体制を変更させる存在様態文」と「存在様態のシテイル」の関連性について確認する。そこから、福嶋(2006)が言う「格体制を変更させる」現象について説明する。そして先行研究からまとめたシテイル形式の特徴をもとに、改めてデータベースから「格体制を変更させる存在様態文」の実例を収集し、考察する。

doi:10.6342/NTU201703274

第 4 章では、名詞の側面から「格体制を変更させる存在様態文」を論ずる。データベースから収集した実例における名詞の傾向を観察し、それが「格体制を変更させる存在様態文」とどのように関連しているのかについて検討する。

第 5 章では「格体制を変更させる存在様態文」を動詞の側面から論ずる。収集した実例の観察から、どのような動詞が「格体制を変更させる存在様態文」の述語になりやすいのかということを調べる。具体的に、まずは福嶋(2004)が提示した手がかりを説明し、その手がかりから生ずる問題について説明する。さらに、動作継続文と結果継続文に分け、分析を行う。そして分析結果から、「格体制を変更させる存在様態文」の動詞の側面から見た特徴について述べる。

第 6 章では結論と今後の課題について述べる。

doi:10.6342/NTU201703274

第 2 章　先行研究

「格体制を変更させている～テイル」という呼称は、福嶋(2004)の研究において初めて出現する。しかし、「格体制を変更させる」現象そのもの、そして「存在様態を表す」シテイル形式については、それ以前から多くの学者によって研究がされてきた。以下では、それらの先行研究をまとめる。

2.1　杉本(1988)の研究

杉本(1988)は、従来のアスペクトの観点[3]に反して、テイル形は二つのアスペクト的意味を持っている多義語であると述べた。同時に、それを証明するために、結果相[4]のテイル形と継続相のテイル形との違いについて検証を行い、以下のような例文を提示した(杉本 1988：107)。

(1)　a.　道端で人が死んだ。

　　b.　*道端に人が死んだ。

　　c.　道端で人が死んでいる。

　　d.　道端に人が死んでいる。

(2)　a.　道路脇で車がつぶれた。

　　b.　*道路脇に車がつぶれた。

[3] 例として、金田一(1976)、奥田(1977)、寺村(1984)などが挙げられる。それぞれの主張内容は異なるものの、アスペクト的意味からシテイル形式の特徴を見出すという点では共通している。一方、杉本(1988)はシテイル形式が二つのアスペクト的意味を持っている多義語であると主張し持論を展開した。

[4] 杉本(1988)は Comrie(1976)の定義から、「結果相」と「継続相」の呼称を借用したが、それらはいわゆる「結果継続」と「動作継続」と同じものを指す。なお、本論文では後者の呼称を用いることにする。

doi:10.6342/NTU201703274

c.　道路脇で車がつぶれている。

d.　道路脇に車がつぶれている。

上記の例から分かるように、結果継続のテイル形の場合はテイルとの接続によって、本来取ることのできないニ格が、取れるようになっている。それに対して、動作継続のテイルの場合では、このような現象は起こらない。

(3)　a.　図書館で太郎は勉強した。

b.　*図書館に太郎は勉強した。

c.　図書館で太郎は勉強している。

d.　*図書館に太郎は勉強している。

(4)　a.　校庭で子供達は遊んだ。

b.　*校庭に子供達は遊んだ。

c.　校庭で子供達は遊んでいる。

d.　*校庭に子供達は遊んでいる。

以上のように、結果継続のテイル形と動作継続のテイルとの、動詞の格結合能力に対する影響力の相違を、結果継続のテイル形と動作継続のテイル形との差異として杉本(1988)は挙げた。

しかしながら、前述したように、「池に鯉が泳いでいる(福嶋 2004：90)」「あそこに鳥が飛んでいる(岡 1999：118)」などの動作継続文においても、格の結合能力に影響を与えている例がある。さらに、結果継続の例文の中にも、「*五七二号室に窓が開いている(福嶋 2004：93)」のような、ニ格を許容できないシテ

doi:10.6342/NTU201703274

イル形が存在している。これらの事実から分かるように、結果継続文と動作継続文との違いのみでは、福嶋が言及した「格体制変更」という現象を説明するには不十分であると言えよう。

ただし、杉本(1988)は、「このような影響の違いは、動作継続の「ている」の場合、完全に形式動詞化し、一語となっているが、結果継続の「ている」の場合、まだ比較的「いる」の独立性が高いということを意味するかもしれない」とも述べた。つまり結果継続文において、「いる」という状態動詞の「状態性」は、テイルの形にしても残されたままであり、動詞の格結合を他の格助詞ではなく、ニ格に変えるのも、結果継続文の状態性からの影響であると考えられるということである(杉本 1988：108)。これは大変価値ある論述であり、本論文内の実例分析ではこの点を考慮する。

2.2　岡(1999)の存在構文に基づくテイル・テアル構文

従来、シテイル形式は主にアスペクトの観点から研究されてきたが、岡(1999)は認知言語学の観点からシテイル形式について研究した。そして、シテイル形式は事態を一種の存在（存在様態）として捉えた表現方法であり、状況のあり方を表すと説明した。つまり岡の説明から引用すると、シテイル形式を事態の存在化形式として一時的に規定する。また、アスペクトを状況の在り方＝存在様相を述定する仕方として、すなわち、実現した事態が「今、ここで、私において」現れたものとして把握する、という見方である。(岡 1999：20)それは従来のアスペクト観点とは大きく異なるものであり、野村(2003)の論述との接点にもなっている。

doi:10.6342/NTU201703274

これに基づき、岡(1999)はさらに現代日本語におけるテイル・テアル構文が、基本的な存在構文を中心に、放射状カテゴリーを成していると指摘した。岡によると、中心的な存在構文は、「空間的場所ニ実体ガ存在する」という眼前描写文であり、すなわち「存在文」のことを指している。そして「存在様態型構文」とは、「空間的場所ニ実体ガある状態で(V テ)存在する」という構文であり、存在文の一種と考えられる(岡 1999：20-21)。例えば、次のような例文は「存在様態型構文」に属している。

(5)　あそこに鳥が飛んでいる。(*あそこに鳥が飛ぶ)

(6)　机の上に本がおいてある。(*机の上に本が置く)

上の例が示したように、「存在様態型構文」のテイル・テアル文は、場所ニ格との共起、そして眼前描写文であること(主題化文ではなく実体がガ格で表されている)が特徴であり、中心的存在構文の延長であると考えられる。場所ニ格は「飛ぶ」、「置く」等の本動詞ではなく、存在動詞イル・アルに要求されている。そして「動詞テイル」の部分でその存在のあり方を表している。

存在様態型構文について、岡(1999)は、さらに以下の例文を提示し、説明した。

(7)　あそこに鳥が飛んでいる。/あそこに鳥がいる。

(8)　テーブルの上に魚が焼いてある。/テーブルの上に魚がある。

存在様態型構文には、「座る」「立つ」「置く」「つける」など、場所ニ格をとる動詞と共起する場合が多い。しかし、上記の例では、「飛ぶ」や「焼く」など

doi:10.6342/NTU201703274

のニ格を要求しない動詞と共起している。これに対し岡は、動詞自体がニ格を要求するのではなく、存在動詞の「イル」「アル」がニ格を要求しているからであると主張した。同時に、これらの事実は存在様態構文の存在を証明できる一つの大きな根拠であるとも述べた。実際に、例(7)(8)の「動詞テイル」の部分を省略しても、文は成り立っており、「動詞テイル」の部分は修飾成分であると考えられる。

さらに、岡(1999)は、例(7)(8)ような「存在様態型」の文は、本来のイル・アルの使い分け、具体的には、有情・非情の使い分けを反映していると提唱した。しかしこの提唱に対して、福嶋(2004)は以下の例文とともに疑問を投げかけた。

(9)　冷蔵庫にビールが冷えているよ／*冷蔵庫にビールがいるよ。

(福嶋 2004：93)。

岡(1999)の提唱では、上記のような文は説明ができないのである。福嶋(2004)は存在様態文を解明するにあたって、岡(1999)の論説は重要であると述べると同時に、上述の問題は存在様態文の今後の研究に大きな影響を与えないものの、その有情・非情の問題に関しては、まだ議論の余地があると述べた。

2.3　野村(2003)の存在様態を表すシテイル

野村(2003)はあらゆる現代日本語の文を、その内容に応じて存在文、動詞文、形容詞文の三種類に分類した。従来の研究観点から見ると、「動詞文」とは主に「動作」に着目した文であり、「動作の主体」の存在が無視されがちである。し

doi:10.6342/NTU201703274

かし、主体が存在しないわけではないので、「存在を含意する」文とされている。

野村(2003)は、シテイル形式が動詞のアスペクト的形式と規定されるのは、あくまでも動詞の側面から見た場合のみであり、述語全体としてシテイル形式を見た場合、やはり存在的な意味を表す側面があることを認めなければならないことに言及している。そこから、野村はさらに、述語全体としてのシテイル形式の意味を、次の五つにまとめた(野村 2003：2)。

① 存在様態

② 動作継続

③ 結果継続

④ 完了

⑤ 単純状態

上記五つの意味の関係性は、以下の図式で表すことができる (野村 2003 : 3)。

存在文

□存在様態

□動作継続□結果継続　　□結果継続

□完了　　□単純状態

動詞文　　形容詞文

上記のトライアングルが示すように、□動作継続と□完了とは、動詞文の性質に近く、□結果継続と□単純状態とは、形容詞文の性質に近い。□結果継続が二

doi:10.6342/NTU201703274

箇所に示されているのは、このタイプのシテイル文が動詞文的側面と形容詞文的側面を兼ねて備えているからである。

野村(2003)は以上の分類を踏まえ、シテイル文に対してさらに次のように説明をした(野村 2003：5)。

(10)　夜の空に高い塔がそびえています。

(11)　遠くには、南アルプス、北アルプスの山々が連なっている。

(12)　ここには骨も埋まっているんだし。

上記の例文中のシテイル形式は、多くの論説では「結果状態」、あるいは「単純状態」に分類されるが、同時にそれらには存在様態の一面があると認めざるを得ないというのが野村の主張である。野村によると、以下の条件で上記の例文を観察すると、その「存在様態性」が際立つという(2003：4)。

a アル・イルに置き換えて文意が通ずること[5]。

b ニ格で場所が表されること。

c 動作本来の活動性が認められないこと。

このことから分かるように、存在様態文は多くが、□結果継続に連続する傾向があり、それは両者が同じく事態を静止的に捉えていることの表われである。□動作継続に関しては、存在様態性がないように見えるが、野村(2003)は、次のように動作継続文について説明した。

[5] 野村(2003)は、明確には言及していないが、ここではシテイル形式をイル・アルに置き換えることを指していると考えられる。

doi:10.6342/NTU201703274

(13)　橋の下に水が流れている。

(14)　橋の下に川が流れている。

(15)　この町には川が三本流れている。

例(13)(14)(15)のシテイル形式は「動作継続」に属しており、これが動作継続の動態面と考えられる。ただし、前述した a、b、c の条件、さらに前後の文脈、または場面などを考慮すると、「橋の下に水がある」「橋の下に川がある」「この町には川が三本ある」という意味で使われている可能性が全くないというわけではないと思われる。もちろん a、b、c の全ての条件が揃う例は多くなく、中でも特に「b ニ格で場所が表されること」の条件を満たす例が少なく、それにより□存在様態と□動作継続との性質的な違いが表現されていると思われる。

上記の野村の論述から確認できるのは、結果継続文にせよ動作継続文にせよ、存在様態を表すシテイル文には、動詞の側面から捉える「動作進行」の動態面と、存在的な側面から捉える「存在様態」の静態面という、二つの側面があることである。ここから、「存在様態を表すシテイル文」における存在面、そしてその特徴を確かめることが可能となる。

本論文は以上の先行研究を踏まえ、次の節では福嶋(2004)が提唱した「格体制を変更させる」現象について議論を進めたい。

2.4　福嶋(2004)の「格体制を変更させる」シテイル文

doi:10.6342/NTU201703274

2.4.1　福嶋(2004,2006)の考察

福嶋(2004)は、以下の例文を比較し、興味深い現象を発見した(福嶋 2004 : 90)。

(16)　a*　池に鯉が泳いだ。

　　b　池に鯉が泳いでいる。　[動作継続]

(17)　a*　庭に犬が死んだ。

　　b　庭に犬が死んでいる。　[結果継続]

(16)a(17)a が現代日本語として不自然な文であるが、動詞をシテイル形式に変更した(16)b(17)b は自然な文である。この現象について、福嶋(2006)は以下の例文を比較することで、説明をした(福嶋 2006：32)。

(18)　a 椅子に健が座った。

　　b 椅子に健が座っている。

例文(18)の a、b 両方ともが自然な文である理由は、「座る」という動詞自体が格体制として、ニ格を要求するからである。それに対して、例文(16)(17)の「泳ぐ」「死ぬ」はニ格が要求されない動詞である。それにもかかわらず、シテイル形式に変更すると、ニ格に対する許容度が高まり、自然な文として成立した。つまり、シテイル形式で動詞の格体制を変更させることは、文としての許容度を高める作用があるということである。福嶋(2004)は、このような格体制を変更させるシテイル形式を、「格体制を変更させている～テイル」と呼んだ。例文が

doi:10.6342/NTU201703274

示したように、この文法現象は、動作継続にも結果継続にも生じる現象であり、動作継続と結果継続の違いによって、この現象を説明することはできない。

そして福嶋(2006)の調査結果によると、「格体制を変更させている～テイル」現象が起こっている文には、「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順が圧倒的に多いということが示された。福嶋は、この語順の傾向が存在文の傾向と一致することに着目し、「格体制を変更させている～テイル」は、実は野村(2003)が提示した「存在様態を表すシテイル」とは同様のものではないかと指摘した。

本論文では、福嶋(2004)が提示した「格体制を変更させている～テイル」現象を「格体制を変更させる」現象、そして「格体制を変更させている～テイル」現象の起こっている文を「格体制を変更させる存在様態文」と区別して、議論を進めたい。

2.4.2　福嶋(2006)の問題点

前述した通り、福嶋(2006)は、「格体制を変更させる存在様態文」の「N1 ニ N2 ガ V テイル」という語順が、いわゆる存在文と一致し、さらに、「格体制を変更させる存在様態文」は、「(ドコドコニ)～ガ、イル・アル」という主体の存在と、「ヒト・モノがどのようにあるのか」という様態の 2 つが同時に表されているため(福嶋 2006：114)、すなわち、野村(2003)が提示した「存在様態」を表していると指摘した。さらに福嶋は、もし場所ニ格が「存在場所」ではなく、「動作場所」、あるいは「出来事の起こった場所」を表すとならば、前述した「池に鯉が泳いだ」のような非テイルの文型において、「場所ニ格句」が出現できないという事実を説明できないと説明した。

doi:10.6342/NTU201703274

しかし、上記の福嶋の論述に基づき、さらに「N1 ニ N2 ガ V テイル」という福嶋が提示した語順で、(19)の例文を(20)のように言い換えると、不自然な文となってしまう。

(19)○　池に鯉が泳いでいる。

(20)*　プールに子供が泳いでいる。

上記の例(19)(20)は、前述の福嶋(2006)が提示した例(15)の語順と同じであり、ニ格の名詞 N1 と、ガ格の名詞 N2 を、それぞれ「プール」と「子供」に言い換えた例である。プールという場所に、子供が泳いでいるという様態で存在していると解釈すれば、文法上何ら差し支えないはずであるが、実際は不自然な文である。この例により、福嶋(2006)の語順の傾向という説明のみでは、うまく説明できないということが明らかであり、ニ格の名詞 N1 と、ガ格の名詞 N2 には、何らかの制約があると考えることもできる。

また、同様に「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順で次のような文を作成すると、やはり不自然な文となってしまう。

(21)○　池に鯉が泳いでいる。

(22)??　池に鳥が遊んでいる。

例(22)内の N2 名詞は「鳥」であり、「鯉」と近似的な動物名詞であるため、比較には差し支えないであろう。一方、テイル形のままで、例(21)の「泳ぐ」を「遊ぶ」に変更すると、やはり不自然な文となってしまう。「泳ぐ」では自然な文と

doi:10.6342/NTU201703274

して成立するのに対し、なぜ「遊ぶ」では不自然な文となってしまうのか。動詞テイル形への変更に伴い、動詞に起きる文法的変化に対し、動詞の側面からのさらなる説明が必要であると思われる。

福嶋(2006)が提出した「格体制変更させる」現象は、単に形の問題からだけでは明らかにすることは困難であると思われる。また、「格体制を変更させる存在様態文」は、野村が提唱した「存在様態性」をいかに表しているのかという点に関して、更なる調査と分析が必要である。福嶋(2006)は、記述の妥当性を高めるため、言語資料データベースを用い、実例を収集し、統計と分析を行った。しかし、その調査では、「歩ク」「休ム」「泳グ」「死ヌ」という四種の動詞を考察対象としたのみで、考察対象が少ないということは否めない。

以上のことを踏まえて、本論文では、福嶋(2006)が提出した「格体制を変更させる」現象の問題点、及び「格体制を変更させる存在様態文」と「存在様態性」間の関連性に焦点を当て、議論を進めたい。野村(2003)が言及した「存在様態性」とはどのようなもので、「格体制を変更させる存在様態文」は、どのようにその「存在様態性」を表しているのか。これらの問題をはっきりさせるために、まずは「格体制を変更させる存在様態文」の「存在様態性」について述べたい。さらに、実証とともに議論を展開するため、言語資料データベースを用いて、「格体制を変更させる存在様態文」の実例を収集し、分析を行いたい。さらに、構文全体における「存在様態性」からの観点だけでなく、名詞、及び動詞の側面から、「格体制を変更させる存在様態文」について述べたい。

doi:10.6342/NTU201703274

第３章　実例調査

3.1　調査方法

本論文は、国立国語研究所による KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)『中納言』」の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」文字検索データベース[6](以下は BCCWJ と省略する)を使用し、実例収集を行った。福嶋(2006)の調査方法は、まず動詞の格体制として「場所ニ格」をとるとは考えにくい動詞をいくつか選択し、それから選別された動詞に対して調査を行うというものであった。しかし、その「格体制」という概念について、福嶋(2006)では詳しく説明されていない上、「動詞の格体制」というのは、かなり曖昧なものであって、さらなる議論の余地があると思われる。それゆえ、本論ではより全面的な調査を行うため、福嶋(2006)の調査内では先に動詞を決定したのに対し、本論文では先に動詞を決定せずに、福嶋(2006)の提示した「N1 ニ N2 ガ V テイル」という語順を、データベースの検索条件として検索をした。

また、本論文の目的は「格体制を変更させる存在様態文」の特徴についての究明であるため、大量の例文を収集して、数量を統計するという方法は相応しくないと考える。そこで、前章までで言及した文法・文脈条件に合致した例文をできる限り多く選別し、考察を行うことにする。

さらに、すでに前節で述べたように、出現条件として、「格体制を変更させる存在様態文」は静止的な風景描写に該当する場合が多く、前後の文脈との深い関係性が考えられる。したがって、より長い文脈を観察できるよう、調査対象

[6] 検索結果について確認するため、BCCWJ の「少納言」データベースも利用した。

doi:10.6342/NTU201703274

文の前後約 100 字までを文脈観察の対象として取り上げる。

3.2　調査対象—「格体制を変更させる存在様態文」

福嶋(2006)が提出した「格体制を変更させる」現象を解明するために、まずは野村(2003)が提唱した「シテイルの存在様態性」との関連性について説明したい。

福嶋(2006)は語順の傾向から、「格体制を変更させる」現象が起こっている文は、野村(2003)が言及した「存在様態性」を表しており、一種の「存在様態文」であると指摘した。福嶋によると、「格体制を変更させる」現象のある文におけるニ格は、「存在の場所」ではなく「動作場所」を示した場合、「池に鯉が泳いだ」という文が不自然な理由を解釈できない。つまり、もし「格体制を変更させる」現象が起こっている文のニ格が「動作場所」を表すとしたならば、「池に鯉が泳いだ」という文も自然な文として成立するはずである。

ここで強調したいのは、筆者はこのような福嶋の論述を否定したいのではなく、単に「池に鯉が泳いだ」という文が不自然な理由について考えたいということである。そもそも「池に鯉が泳いだ」という文が不自然な理由は、主体の動作を捉える動詞文であれば、動作場所をニ格ではなく、デ格あるいはヲ格で示す場合が断然に多いと思われる。さらに、語順の観点から見ても、場所を文の先頭に置くより、「鯉が池で泳いだ」というように、主格の後に来る方が多いと思われる。すなわち、「動詞文」であれば、「池に鯉が泳いだ」のような語順は出てこないし、ニ格で動作場所を示さないこともごく自然である。

このような事実があることから、福嶋(2006)が主張するような語順の観点からの分析だけでなく、他の観点から「格体制を変更させる」現象を分析する必要

doi:10.6342/NTU201703274

があるように思われる。まずは、「格体制を変更させる」現象が起こっている文におけるニ格が、確かに「存在的な用法」のニ格であると確認する必要がある。「格体制を変更させる」現象を解明するには、「格体制を変更させる存在様態文」が、野村(2003)の唱える「存在様態性」をいかに表しているかということを、さらに考える必要がある。

その他に、前章で述べたように、「N1 ニ N2 ガ V テイル」における N1、N2 の間の制約に関して、その「存在様態性」の概念を踏まえながら説明したい。

3.2.1　ニ格の存在的用法

本節ではまず、ニ格の「存在的用法」について述べたい。

3.2.1.1　モノの存在場所を表すニ格

山田(1981)は、機能語の観点から、ニ格を使用した場所表現についてまとめた。同時に、日本語の場所表現には、主に「場所+ニ格」と「場所+デ格」の表現方法があり、ニ格は「存在・状態などの場所を表す」のに対して、デ格は「動作が行われる場所を表す」[7]がゆえに、ニ格は「状態動詞」と、デ格は「動作動詞」とともに使われる場合が多いと指摘した。

さらに、両方とも「接触」という共通の意味特徴を持っており、ニ格の「接触」は「静的」であるのに対して、デ格の「接触」は「動的」であると述べた(山田 1981：61)。この点と野村(2003)の「存在様態文の静態面」との関連性につい

[7] 最初にこの観点を提出するのは松村(1957)であるが、山田(1981)を含め、この観点を受けて論を展開する説は、ほかにも多く見られるため、ここでは直接に山田(1981)から引用する。

doi:10.6342/NTU201703274

ては、後ほど他の論説と合わせて説明したい。

そして森田(1980)は、ニ格が主題や行為対象の存在している場所を示す、あるいは存在することによって起こる結果や状態を表すと述べ、ニ格の存在的な用法に関し明確に記述した。また、デ格は意志的な動詞を導くことが多いということから、デ格は主に意志的な行為を中心にその場所を表し、それに対して、ニ格は他の場所からの移動先、または単なる存在を表すと述べた。

定延(2004)は、上述した山田、森田、さらに松村(1957) の論述などを参考に、ニ格は「モノの存在場所」、デ格は「デキゴトの存在場所」を表すとまとめた。さらに、「体育館で入学式がある」という、従来は検討されてこなかった新しいタイプの文を分析し、「入学式」は純粋なモノではなく、「デキゴト」らしさを有するモノであると指摘し、上記の考えが正しいことを立証した。

以上をまとめると、デ格が動的な動作の場所を表すのに対して、ニ格は静止的なモノの存在場所を表すということである。このことは、多くの論説で確認されている。本論はこれらを踏まえて、次の説明に進めたい。

3.2.1.2　認知言語学から見る存在的なニ格

森山(2008)は認知言語学の観点から、あらゆる事態には、動作一連のプロセスを把握する「プロセス的事態」と、動作プロセスを含まない「存在論的事態」が存在すると述べている(森山 2008：109)。それを踏まえ、日本語におけるニ格は、動作のプロセスを表す「移動先」、「動作の相手」などの「プロセス的用法」以外に、モノの「存在の位置」や「時点」、「経験主」を表す「存在論的な用法」も発達していると指摘した。同時に、ニ格の「存在の位置」、「時点」や「経験

doi:10.6342/NTU201703274

主」を表す用法は、いずれもガ格で表された参与者の空間的、時間的、心的な「位置」を表し、位置づけられる存在とその位置といった「対峙性」[8]を有していると述べた(森山 2008：49)。

総じて言うと、ニ格の用法は動力連鎖や移動というプロセスを扱う「プロセス的用法」と、存在的事態というプロセスを扱う「存在論的用法」と二種類に分けられる。「庭に犬が居る」という存在文は、まさに「存在論的用法」に属している。「存在論的用法」の場合、動作のプロセスが含まれず、また背景化されるため、ニ格はプロセス性(動作や動作による移動と変化)を持たないとされる。なお、ガ格に対する「対峙性」は静的(心的)なものである(森山 2008：125)。言い換えると、ガ格は「位置づけられるもの」を表すのに対して、ニ格は「位置づける」場所を表している。両者の間では静止的な関係を成している。

要するに、認知言語学の角度から「庭に犬が居る」という存在文を分析すると、話し手はガ格で存在の主体を表し、ニ格で存在の位置を表していると考えられる。すなわち、文全体を「静止的に」捉えているわけである。

上記の森山(2008)から確認できることは、以下の二点にまとめられる。まず一点目は存在論的用法に属する存在文は、動力連鎖のプロセスを含まないため、文全体が静止的に捉えられているということである。そして二つ目は、ガ格は存在の主体を表し、ニ格は存在の位置を表すということである。

次節では、以上の森山の所論をもって、「格体制を変更させる存在様態文」の「存在様態性」について検討したい。

[8] 森山(2008)の「対峙性」についての説明によると、認知主体としての「私」が支配する領域、あるいは「私」が第一に視点を向ける対象の位置する領域が「視点領域」であり、それ以外の領域が「対峙領域」ということである。そして同時に、「私」、あるいは「私」が第一に視点を向ける対象はガ格で表し、それに対峙する領域(所在位置など)はニ格で表されると述べている。

doi:10.6342/NTU201703274

3.2.1.3　「格体制を変更させる存在様態文」における「存在的な静態面」

前述した各説を総合的に見ると、まずはニ格の「存在的用法」、そして存在文の「静態面」について確認できた(山田 1981 など、森山 2008)。そこから、福嶋(2004)の「格体制を変更させる」現象について考えるために、まず次の例を参照されたい。

(1)　池に鯉が泳いでいる。

(2)??　池で鯉が泳いでいる。

動詞「泳ぐ」は、もともと「鯨が海を泳ぐ」「魚が池で泳ぐ」のように、デ格、ヲ格を要求する動詞であるため、「池で鯉が泳いでいる」は文法的に正しい文になるはずである。しかし、 (2)のようにデ格に置き換えると不自然な表現となってしまう。その不自然な理由は、「存在文における静態面」にあると思われる。前述した山田(1981)も、ニ格とデ格は「接触」という意味特徴を持ちつつも、ニ格における接触の仕方は「静的」であるに対して、デ格は「動的」なものであると述べ、そこからニ格とデ格の性質的の違いが分かると論じている(山田 1981：62)。

これを踏まえ、上記の例文における話し手の心的経路を探ると、話し手は「鯉が池で泳いでいる」という動態的な意味より、「池に鯉がいる」という静止的な意味を先行させたいと考えていると推測できる。すなわち、話し手の心理的なプロセスから見て、「池に鯉が泳いでいる」のニ格をデ格に変換できないのは、「存在」という静止的な事態を表したいがゆえなのではないのかと考えられる。

doi:10.6342/NTU201703274

つまり、「池に鯉が泳いでいる」という文は、話し手の認知の中では動作継続文というより、存在文に近いものであると考えられる。

以上の所論をもとに考えれば、福嶋(2004)の「格体制を変更させる」現象は十分に説明可能であると思われる。福嶋(2004)によると、「格体制を変更させる」現象とは、動詞のシテイル形式への変更に伴い、本来の動詞の格体制にないニ格を新たに出現させるという現象である。ではなぜ「格体制を変更させる存在様態文」において、そのようなプロセスが必要なのか、それは、野村(2003)が提示された「シテイル文の存在様態性」と関係があると思われる。本来、「動作進行」の動態面を捉えるシテイル文は、「格体制を変更させる」というプロセスを通して、「存在」を表す静態面という側面を前景化させる。つまり、「動作」を中心とするデ格とヲ格は、その「存在的静態面」を前景化するために、ニ格の静態的存在性を取り入れることで、存在的静態面を前景化すると考えることが可能である。これらを考慮すれば、福嶋(2004)の「格体制を変更させる」現象については説明できると思われる。

この存在的静態面を前景化させるプロセスについては、以下の各章で、異なる側面から詳しく説明していきたい。

3.2.2 「N1 ニ N2 ガ V テイル」における N1 と N2 の制約

本節では、前述した「N1 ニ N2 ガ V テイル」における N1 と N2 の制約について考えたい。

福嶋(2004)は、「格体制を変更させる存在様態文」の「N1 ニ N2 ガ V テイル」という語順に焦点を当て、「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順の傾向が存在文の傾

doi:10.6342/NTU201703274

向と一致するということにより、「格体制を変更させる存在様態文」は、野村の提唱した「存在様態性」を表していると指摘した。

ところが、福嶋のいう「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順で、ガ格の名詞とニ格の名詞を、次の例のように変更すると、不自然な文となる。

(3)○　池に鯉が泳いでいる。

(4)*　プールに子供が泳いでいる。

例(4) の語順は「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順と同じであるが、ニ格の名詞 N1 と、ガ格の名詞 N2 を、それぞれ「プール」と「子供」に言い変えると、不自然な文となる。これは、福嶋(2004)の語順の傾向性という説明のみでは、十分な説明ができない。例(4)が不自然な文となる理由については、野村(2003)が提唱した存在様態文の「静止的な存在面」との関連性を踏まえて説明したい。

前述したとおり、「格体制を変更させる存在様態文」は、話し手の認識から「静止的事態」として捉えられる。以下では、これを前提に議論を進める。

まずは「プールに子供が泳いでいる」という文が示す場面を考えたい。「プールに子供が泳いでいる」という文を聞いたさいに、聞き手の頭の中に浮かんでくる場面は、恐らく「子供がプールに浮いている(あまり動いていない)」という「静止的な場面」に近いと思われる。しかし、我々は普通、「池に鯉が泳いでいる」と同じように、子供が「プールに浮いている」といった静止的な場面は、なかなか想像しがたいのであろう。それはなぜかというと、N1 の「プール」というのは、N2 の「子供」の普段の存在場所として相応しくないからであると考えられる。言い換えると、子供は普段プールに「居る」わけではなく、泳ぐと

doi:10.6342/NTU201703274

きだけプールの中にいるため、プールの中では「泳ぐ」という「動態面」だけが捉えられるものと考えられる。

これは、N1 は N2 が違和感なく存在できる場所でないといけないという制約が存在していることを示唆している。

つまり、存在様態を表す「N1 ニ N2 ガ V テイル」構文においては、文を成立させるためには、「N2 は N1 に存在する」という合理性は第一に満たさなければならない条件であるということである。そしてさらに、N2 が N1 において、風景描写のように静止の場面に近い状態で居られるこそ、自然な文として成立するのである。

これらを踏まえ、以下の例文をもって、N1、N2 の制約についてさらに詳しく説明したい。

(5)*　山頂に後輩がうろついている。

例(4)と同じように、聞き手がこの例(5)を不自然と感じる理由として、まず、例(5)は「風景的、静止に近い描写」として見かけることはあり得ないからという点が挙げられる。また、N1 の「山頂」は、N2 の「後輩」の普段の存在場所としては考えられないという点も、例(5)を不自然と感じる理由に挙げられる。後輩は普段いつも山頂に存在する(居る)わけではなく、恐らく登山をした際にのみ、山頂に存在する(居る)からである。このように、例(5)からも、存在様態を表す「N1 ニ N2 ガ V テイル」構文では、N1 は N2 が違和感なく存在できる場所でないといけないという制約が存在するということが見出せた。

さらに、次の例も参照されたい。

doi:10.6342/NTU201703274

(6)*　572 号室に窓が開いている(福嶋 2006：116)。

例(6)は結果継続文であり、静止的な描写に属している。一方で、存在様態文としても捉えることができるため、「572 号室に窓が開いている」と言っても何ら差し支えはないはずであるが、実際は不自然な文となってしまう。その理由は、やはり N1、N2 の制約が関係していると考えられる。窓はそもそも 572 号室の一部であり、「572 号室に窓が開いている」と言うより、「572 号室の窓が開いている」と言った方が、遥かに自然である。つまり、N1「572 号室」は N2「窓」が普段存在する場所ではなく、N2「窓」は N1「572 号室」の一部なのである。つまり、この例文が不自然な文となる原因は、N1 は N2 が違和感なく存在できる場所でないといけない、という N1、N2 の制約に反しているからであると考えられる。

このように、格体制変更の現象が起きた際に、該当存在様態文「N1 ニ N2 ガ V テイル」には、N1 は N2 が違和感なく存在できる場所でなければならないという制約が存在するという説明が可能であると言えよう。

3.2.3　まとめ

ここでは、まず「格体制を変更させる存在様態文」の特徴をもう一度整理する。「格体制を変更させる存在様態文」を構成するには、以下の三つの条件を満たす必要がある：

doi:10.6342/NTU201703274

□　話し手が文全体を「静止的事態」の存在文として捉えていること。

□　ニ格が存在場所を表し、そのニ格によって「存在」という「静止面」が引き出されること。かつ、シテイル形式で主体の様態を表せること。

□　N1 は N2 が違和感なく存在できる場所であること。

以上の三つの条件が揃えば、基本的に「格体制を変更させる存在様態文」として問題はない。また、三つの条件が相互に影響し合う場合も多い。

福嶋(2004)は「格体制を変更させる存在様態文」における特徴を、主に「歩ク」「休ム」「泳グ」「死ヌ」の四種の動詞を対象に考察した。しかし、四種の動詞のみでは、考察対象としては十分ではないと言わざるを得ない。さらに、前後の文脈も考察を進める上で重要な要素となるため、前後の文脈も十分に考慮する必要がある。

したがって、今回は主に福嶋の「格体制を変更させる存在様態文」を対象に、他の文字検索データベースを使用し、実例収集を行うことにした。

3.3　調査結果

データベース検索によって、主に以下のような例文が収集された。

(7)　「よく解りましたね。おまえさま」「この河岸を塒にしている源太を知っているだろう。この前船で送ってきた男さ」宗右衛門は話を替えた。「よく河岸へ川の流れを見に行きました。まだおかみにならない時分、子供が川を見るのが大好きで、浅瀬に小さいお魚が泳いでいる

doi:10.6342/NTU201703274

のを見に行きますと、源太さんがいましたよ」宗右衛門は口をきゅっと閉じて顎を引いた。顎の下の肉がぶくぶくとふくれたさまは蛙の顎を思わせた。　(梅本育子『桃色月夜』)

(8)　ある日のこと、森のずっと奥のほうまで入ったぼくらは、爆弾が空けた一つの大きな穴の縁に、一人の兵士が死んでいるのを見つけた。兵士の五体はまだ揃っている。両眼だけが欠けている。カラスの仕業だ。ぼくらは、彼の銃と弾薬と手榴弾を取る。銃は柴束の中に紛れさせ、弾薬と手榴弾は籠に入れて茸で覆う。

(アゴタ・クリストフ(著)/堀茂樹(訳)『悪童日記』)

今回、動詞は特に限定していないのであるが、例(7)(8)から見てとれるように、動作継続文の例(例 7)にも結果継続文の例(例 8)にも、福嶋(2006)の選別した動詞と同じ動詞が出現した。このことから、ある種の特別な動詞しか、「格体制を変更させる存在様態文」の動詞になれないという可能性も考えられる。したがって、「格体制を変更させる存在様態文」の動詞については、後章でさらに詳しく分析を行う。

そして、福嶋(2006)は「場所」と「方向」を異なる概念として扱っているため、「右の方に歩いている」などの「方向+ニ格」の例文は調査対象外としている。本論文もその方針に従うが、以下のような例文には注意が必要である。

(9)　こちらは少し歩いたところで撮りました。他所のお庭なんですが通りからこんな風に見えるんです。素敵でしょう！？左が【伊呂波紅葉（い

doi:10.6342/NTU201703274

ろはもみじ）】、右が【柿（かき）】です。左上に椋鳥が飛んでいるのがわかりますか？柿の実を何羽かでついばんでいましたよぉ～。これはとても不思議でした。【蔦（つた）】の赤と緑どうして部分的に紅葉しているのでしょうねぇ。　　(Yahoo!ブログ)

「左上」というのは、確かに方向を指している。しかし、例(3)の文脈を詳しく観察すると、それは「鳥が左上の方向に飛んでいる」ではなく、「鳥が左上の範囲の中を飛んでいる」と理解した方が正確である。次の例文と比べると、そのニュアンスがより明確に感じ取れる。

(10)　下に防弾甲を着こんだ大きな肩から、ハンガーに吊り下げたように仕事用の外套の直線的なシルエットが滑り落ちている。手を中に差し入れると、留め具を外す音がした。右手に小型の青龍刀が握られた。仕事をするとき、彼の顔からは一切の表情が消える。頬に数滴の血が飛んでいるのは先の一仕事のものだろう。それが冷酷な面差しをさらに強調していた。軽薄なリオも、シドの前ではさすがに神妙な顔で背筋を伸ばし、銀のバケツを持って従っていた。

(吉川良太郎『ギャングスターウォーカーズ』)

例(10)は明らかに、「頬のところに数滴の血が飛んでいる」という意味を表している。実は、福嶋(2006)の研究内にも「方向+ニ格」と思われる例文がある。

(11)　堤防の上には避難民がたくさん歩いていた。僕は能島さんが足ばや

doi:10.6342/NTU201703274

に歩くので、咽が渇くし足は痛いし、どうにもついて行けなくなった(福嶋 2006：107)。

上の福嶋の例を熟考すると、「上の方向」というより「上の空間」を指していると考えられる。本論文では、このような「方向+ニ格」と「空間+ニ格」とで判断が難しい文は、前後の文脈の観察を通し、ニ格が指すものが「空間」であると確証を得たのち、その文に対し考察を行う。

さらに、以下のような例文の場合は、ニ格の前の名詞が場所・空間名詞ではあるが、ニ格との使用が習慣化されている可能性がある。そのため、今回の調査では、これらを例文として取り上げないことにする。

(12) 日曜日は午前中は将棋の鑑賞をして午後から奥さんと散歩に出かけました。北方面は教会、区役所がありいたるところに花が咲いています。区役所ではイチョウの紅葉が奇麗でした。

(Yahoo!ブログ)

(13) 或る日、大寺さんが午睡から醒めて窓の下を覗くとタロオがいなかった。鎖も見当らない。—おい、おい。大寺さんは細君を呼んだ。—何ですの？這入って来た細君は、眼を丸くした。—あら、厭だ。タロオがこんな所にいるわ。大寺さんは吃驚して、ベッドの下を見た。床に鎖を長く引摺って、その先にタロオが寝ていた。二人の会話で眼を醒したらしく、寝た儘尻尾を振っているのである。

(小沼丹『懐中時計』)

doi:10.6342/NTU201703274

次に、代表的な例文を一つ取り上げ、前節以前で言及した文法・文脈条件と照らし合わせて、分析を行いたい。

(14)　谷中のネコは太りぎみまずは「ネコ好きの聖地」と呼ばれる、東京の下町・谷中に行ってみた。なぜ聖地なのかというと・夏目漱石が『我輩は猫である』を書いた家があるから・本物のネコ　もいる猫グッズ専門店「ねんねこ堂」があるから。しかしなんといっても一番の理由は・町にネコがうろついているからだろう。谷中にいると、どこかの飼いネコの散歩によく出くわす。ネコを飼うにも、散歩に出すにもいい環境なんだろう

(大塚幸代『大人の自由研究』)

上の例(14)から分かるように、下線の箇所は「格体制を変更させる存在様態文」である。「ネコがうろついている」の部分だけを見ると、一般的な動作継続文であるが、ニ格によって「ネコ」の存在場所が提示されたことで、風景の描写としての文の「静止的な側面」が引き出されている。つまり、この文を「町にネコがいる」と言い換えても、前後の文脈にも何ら差し支えはない。また、前述した「格体制を変更させる存在様態文」を構成する条件の一つである、「N1 は N2 が違和感なく存在できる場所であること」という点から考えると、ネコは町で日常的で見かけ、ネコが町に存在する(居る)のはごく普通なことであるためこの条件を満たしていると考えられる。

他に、BCCWJ から収集した「格体制を変更させる存在様態文」の前後の文脈を分析してみると、多くが風景の描写であり、例(14)の状況に近い。すなわち、

doi:10.6342/NTU201703274

多くが「静止的な事態」として捉えているということである。それらの例文に関し、次章ではガ格名詞の性質を議論するさい、6 章では動詞の傾向性を議論するさいに、それぞれ言及する。

doi:10.6342/NTU201703274

第 4 章　名詞の側面から見る「格体制を変更させる存在様態文」

前章までは先行研究を踏まえて、文全体における文法的特徴、そして文の前後の文脈的特徴から、「格体制を変更させる存在様態文」の特徴をまとめた。さらに、それらの文法・文脈的特徴を考察するために、データベースを使用し、前述の条件を満たした実例を収集した。

ここでは、さらに詳しく「格体制を変更させる存在様態文」について解明するために、前章で収集した例文の分析を行う。主に注目するのは以下の点である。例えば、「浅瀬に小さなお魚が泳いでいる」のような存在様態文を構成する語彙はどのようなものがあるのか。また、どのような文法条件の下で、「格体制を変更させる」現象が起きるか。そして、「格体制を変更させる」というプロセスを通して、一体どのような変化が起きたのか。これらの点を解明していきたい。そして、これらの問題を解明するため、第 5 章、及び第 6 章では BCCWJ で収集した実例を取り上げながら、分析を進めたい。

まず、ガ格名詞の特徴について言及する。前章では、「格体制を変更させる存在様態文」は主に景色描写としての文脈的機能を果たしているがゆえ、文全体を静止的に捉えなければならないほか、「N1 ニ N2 ガ V テイル」という構文では、N1 は N2 が違和感なく存在できる場所でないといけないという制約が存在するという結論を得た。これらを前提として、さらに深く例文を観察すると、実は各例文のガ格名詞(N2)にも、共通の特徴が見られることが判明した。以下では、今回収集した例文とともに、その特徴について説明する。

doi:10.6342/NTU201703274

4.1　ガ格名詞の特徴

まず、収集した例文を参照されたい。

(1)　門を入ると、一気に全体が見渡せてしまう。池とそれに沿った茶色い土の道と芝生が単純簡明にレイアウトされていて、それで終りである。平凡といえばこの上なく平凡、大胆というか、呆気ないというか…。短かく刈られた緑の芝生の上に、**頭のてっぺんの赤い鶴が**歩いている。かんがえごとをしながら、かなり広い池の縁を歩き、裏門から外へ出る。そこも旭川で渡し舟がある。有料である。向う岸に着くと、そこは烏城だ。　(吉行淳之介『一病息災』)

(2)　こちらは少し歩いたところで撮りました。他所のお庭なんですが通りからこんな風に見えるんです。素敵でしょう！？左が【伊呂波紅葉（いろはもみじ）】、右が【柿（かき）】です。左上に**椋鳥が**飛んでいるのがわかりますか？柿の実を何羽かでついばんでいましたよぉ〜。これはとても不思議でした。【蔦（つた）】の赤と緑どうして部分的に紅葉しているのでしょうねぇ。　(Yahoo!ブログ)

(3)　「よく解りましたね。おまえさま」「この河岸を塒にしている源太を知っているだろう。この前船で送ってきた男さ」宗右衛門は話を替えた。「よく河岸へ川の流れを見に行きました。まだおかみにならない時分、子供が川を見るのが大好きで、浅瀬に**小さいお魚が**泳いでいるのを見に行きますと、源太さんがいましたよ」宗右衛門は口をきゅっと閉じて顎を引いた。顎の下の肉がぶくぶくとふくれたさまは蛙の顎

doi:10.6342/NTU201703274

を思わせた。　　(梅本育子『桃色月夜』)

(4)　水辺に**葦が**揺れている。人の背丈を越える葦の群れが、あたり一面を覆いつくし、覗き込んでみれば、透明な湖水の奥深くにまで、細長い茎の列が、途切れることなく続いている。湖底の蒼い闇に仄白い影がある。　　(奥泉光『葦と百合』)

(5)　途中、区画整理で道を造っている造成地を抜けるのですが、そこの両側の一面に**秋桜が**咲いています。ちょうど今日くらいが見頃かなぁ。よく観るといろんな色の秋桜が咲いていますね。それに香りも好い！クルマや自転車じゃ絶対に気づかないですね。

(Yahoo!ブログ)

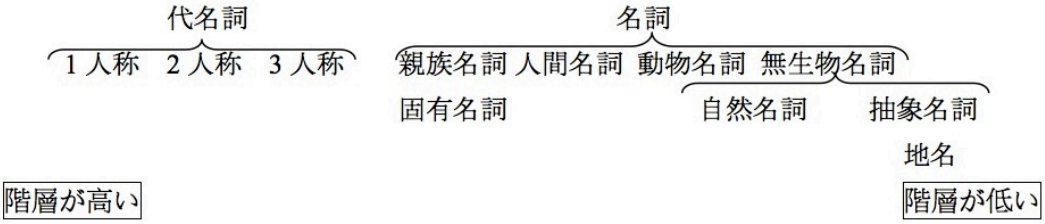
これらの例文から分かるように、ガ格名詞の多くは「鶴」「鳥」「魚」などの動物、あるいは「葦」「秋桜」などの植物である。この特徴を、Silverstein(1976)が提唱した「名詞句階層」の概念を用いて分析したい。そして、その特徴と「格体制を変更させる存在様態文」の「静止的な性質」との関連性について、更なる説明を加えたい。

4.1.1　名詞句階層から見るガ格名詞

Silverstein はあらゆる名詞句を、名詞の種類によって分類し、これらの名詞句が、ある種の階層を成していると提唱した。角田(1991)はその提唱に基づき研究を行い、Dixon(1979)、Zubin(1979)などの研究成果と自身の考察結果をもとに、Silverstein の名詞句階層を以下の図のように表した (角田 1991：39)。

doi:10.6342/NTU201703274

図 1　Silverstein(1976)の名詞句階層



上の図について、Silverstein はあらゆる名詞句を代名詞と普通名詞との二つのグループに分けた。そして、それぞれのグループにおいて、左の階層が最も高く、右に行けば行くほど階層が低くなると述べた。その他に、代名詞のグループの方が普通名詞のグループより階層が高いとも述べた。階層の中の固有名詞とは人間を指す固有名詞のことであり、つまり人名のことを指す。人間名詞とは「少年」「警察官」など、人間に関する一般名詞を指す。自然名詞とは「地震」「風」「津波」などの名詞を指す。また、植物は生き物ではあるが、文法的には無生物のものとして認識されるという。

この階層が表している概念については諸説あるが、Silverstein(1976)は、この階層は動作者、あるいは動作の対象になりやすい度合いを示していると指摘した。すなわち、左の階層が高い方が動作者、そして右の階層が低い方が動作の対象者になりやすいということである。一方、Dixon(1979)は、対象名詞の話し手にとっての重要さに着目し、左に行けば行くほど重要度がより高く、右に行けば行くほど重要度がより低いと述べ、Silverstein とは異なる観点から持論を提唱した。その後、Dixon(1979)と近い概念として、Zubin(1979)はこの階層は話し手の自己中心性(egocentrism)を表していると説明した。さらに、Wierzbicka(1981)

doi:10.6342/NTU201703274

は、対象名詞の話題へのなりやすさの度合いという観点から、階層が右に行けば行くほど、対象名詞が話題になりにくいと説明した。

角田(1991)は、Silverstein(1976)以後の Dixon などの説をまとめ、この階層が話し手の会話に対する関心の度合いを示すと考えるのは妥当であると指摘した(角田 1991：40)。角田(1991)は、代名詞のグループに関し、人間はまず自分(1 人称)のこと、次に話し相手(2 人称)、それからそれ以外の対象(3 人称) という順番で、関心の度合いが順次低くなるというのが普通であると述べた。そして普通名詞のグループに関しては、同じ場面にあるという前提で、人間は普通、階層の高い方に関心をもつ[9]と述べた。言い換えると、階層の最も左側は、階層が最も高く、話し手の会話に対する関心の度合いも最も高い。それに対して、最も右側は、階層が最も低く、話し手の会話に対する関心の度合いも最も低い。つまり、右へ行けば行くほど、話し手の会話に対する関心の度合いが低くなっていくわけである。

ここで一つ疑問が生じる。それは、3 人称代名詞である「彼」「彼女」が、親族名詞や人名の固有名詞より階層が高いのかどうかということである。これは、日本語が 3 人称代名詞からの影響があまり見受けられないがゆえ、すなわち日本語では、3 人称の「彼」「彼女」があまり使用されないがゆえに生じる疑問である。日本語にとっては、3 人称代名詞はこの階層において無用に思えるが、3 人称代名詞を一般的に使用する言語にとっては、3 人称代名詞がこの階層に入るのに十分な理由がある(角田 1991：40-41)。

名詞句階層の概念は、現代日本語における能動文と受動文の使い分けの説明

[9] 例えば、無生物名詞の家と動物名詞の犬が写っている一枚の写真があり、写真に何が写っているかと聞かれた場合、「犬」と答える方が普通であると思われる。同様に、赤の他人と知人が写っている写真を見たさいに、「写真に赤の他人が写っている」と答える人もいないと思われる(角田 1991：40)。

doi:10.6342/NTU201703274

に有効であると言われている。さらに本論文ではデータベースで収集した例文の分析を通し、名詞句階層の概念とガ格名詞の特徴とで関連があると分かった。

BCCWJ から収集した例文を観察すると、ガ格名詞にあたるのは「鶴」「鳥」「魚」などの動物、あるいは「葦」「秋桜」などの植物が多く、いずれも低い階層に属したものである。これは前章で言及した、「格体制を変更させる存在様態文」の「風景描写」という文脈的機能、そして文全体の「静止的な性質」と関連があるように思われる。

ゆえに本論文では、上述の角田(1991)のまとめた名詞句階層の概念を用いて、次節では収集した例文の分析を通し、名詞句階層と「格体制を変更させる存在様態文」との関連性ついて論じる。

4.1.2　ガ格名詞の生物性

前節中の例文が示したように、BCCWJ から収集した例文中のガ格名詞は、ほとんどが動物名詞と無生物名詞であり、名詞句階層の中で、比較的低い階層に属したものである。要するに、名詞句階層での所属階層が低ければ低いほど、「格体制を変更させる存在様態文」の主体になりやすい傾向にあると言えよう。「格体制を変更させる存在様態文」の文脈的な機能から考えると、名詞句階層での所属階層が低ければ低いほど、「静止的な風景描写」の対象としてみなされやすい。さらに、「静止的な風景描写」としてみなされるがゆえ、その「動的な動作」に焦点は当てられないのである。つまり、ここでは福嶋の言う「格体制を変更させる」というプロセスを通して、文全体の「存在的静止面」が引き出され、それと同時に、文の主語であるガ格名詞の名詞句階層における所属階層が下が

doi:10.6342/NTU201703274

り、「静止的な風景描写」として捉えられたのである。ここでもう一度、前節で提示した例文の一つを参照されたい。

(1) 「よく解りましたね。おまえさま」「この河岸を塒にしている源太を知っているだろう。この前船で送ってきた男さ」宗右衛門は話を替えた。「よく河岸へ川の流れを見に行きました。まだおかみにならない時分、子供が川を見るのが大好きで、浅瀬に小さいお魚が泳いでいるのを見に行きますと、源太さんがいましたよ」宗右衛門は口をきゅっと閉じて顎を引いた。顎の下の肉がぶくぶくとふくれたさまは蛙の顎を思わせた。 (梅本育子『桃色月夜』)

上の例文からも分かるように、まず「浅瀬に小さいお魚が泳いでいるのを見に行きます」という文を「浅瀬に小さいお魚が泳いでいる**景色**を見に行きます」と変更し、「格体制を変更させる存在様態文」のところを一種の風景描写として理解しても何ら差し支えはないであろう。これは、文の「静止的な側面」の確かな存在を示唆している。そして「N2 は N1 に存在する(いる)」と言った場合、大変理にかなっていると思われる。なお、ガ格名詞の「小さいお魚」は動物名詞に属しており、名詞句階層の中で比較的に低い位置にある。つまり、この例文は、文全体の静態面が引き出されていると同時に、ガ格名詞の生物性がより低く捉えられ、静態的な風景描写として述べられているのである。

しかし、例(1)の下線部の「格体制を変更させる存在様態文」を以下のように、N2 を人間名詞、または固有名詞に変えると、全てが非文とはいえない点が、疑問として残る。

doi:10.6342/NTU201703274

(1)a*　浅瀬に妹が泳いでいる。

(1)b*　浅瀬に花子が泳いでいる。

(1)c??　浅瀬に少年が泳いでいる。

(1)a、(1)b は、静止的な景色描写文として描写されることはまずありえない文であろう。「浅瀬に妹が泳いでいる」「浅瀬に花子が泳いでいる」という表現より、「妹は池で泳いでいる」「花子は池で泳いでいる」と言った方が自然である。(1)c は絵の内容を説明したり、静止的な場面を述べたりするなどの特定の場面においてのみ成り立つ描写であり、単純な静止的な風景描写としての文とは言い難い。

なお、福嶋(2006)は、以下の例文を提示している (福嶋 2006：111)。

(6)　今彼の前を、勝子の手を曳いて歩いている信子は、家の中で肩縫揚げのしてある衣服を着て、足をにょきにょき出している彼女とまるで違っておとなに見えた。その隣に**姉が**歩いている。

(7)　堤防の上には**避難民が**たくさん歩いていた。僕は能島さんが足ばやに歩くので、咽が渇くし足は痛いし、どうにもついて行けなくなった。

上記下線部の「格体制を変更させる存在様態文」において、どちらのガ格名詞も前述と違い、名詞階層句で低い階層に属していない名詞である。「姉」は親族名詞であり、「避難民」は「人間名詞」である。どちらも高い階層に属した名詞である。そこで、もう一度ここで角田(1991)の提唱する名詞句階層が表す意味

doi:10.6342/NTU201703274

に注意したい。例(6)の全段落において、話題の中心は明らかに「信子」であり、下線部の「格体制を変更させる存在様態文」のガ格名詞が親族名詞の「姉」であっても、「姉」が話題の中心ではない限り、話し手の目の前の景色の一部として述べることは、ある程度可能であると考えられる。例(7)は、下線部の「格体制を変更させる存在様態文」の風景性がより明確である。そして、話題の中心は「僕」と「能島さん」にあり、人間名詞の「避難民」は明らかに描写された景色の一部にすぎないのである。

つまり、角田(1991)の名詞句階層の概念から説明すると、例(6)(7)では、話し手の関心の度合いが最も高いのは「信子」「僕」であり、「信子」「僕」がこれらの会話における話題の焦点となっている。そして、話し手の「姉」「避難民」に対する関心度は「信子」「僕」より低く、それゆえ「信子」「僕」といった話題の一つの背景として扱われるのである。

4.2　中立叙述の「ガ」格による名詞の背景化

次に、「格体制を変更させる存在様態文」における「ガ格」助詞について分析したい。久野(1973)は「ハ」と「ガ」の用法を、以下のように定義した (久野 1973 : 29)。

主題を表す「ハ」: 太郎は学生です。

対照を表す「ハ」: 雨は降っていますが、雪は降っていません。

総記を表す「ガ」: 太郎が学生です。(今話題になっている人物の中では、太郎だけが学生です。)

doi:10.6342/NTU201703274

中立叙述を表す「ガ」: 雨が降っています。(観察できる動作・一時的状態)

久野によると、文の述部が動作、存在、一時的な状態を表す場合、ガ格は「中立叙述」と解釈でき、述部が恒常的状態、習慣的動作を表す場合、ガ格は「総記」としか解釈できない。

上で述べた久野(1973)のガ格助詞用法の定義で「格体制を変更させる存在様態文」を説明すると、「格体制を変更させる存在様態文」は存在文の一種であり、述部の「シテイル」も「存在様態」、「一時的な状態」を表しているため、ガ格の用法は「中立叙述」の用法に属すべきであろう。一方で、「格体制を変更させる存在様態文」のガ格が「中立叙述」の用法であることを確認することにより、「格体制を変更させる存在様態文」における「存在面」をより明確に見出すことも可能である。

角田(1991)は、久野が定義したガ格の用法について、「総記」は「…だけが」という意味で、「中立叙述」は「一種透明無色の表現」であり、名詞句階層の階層が高い方は「総記」、低い方は「中立叙述」の用法の対象になる傾向があると説明した(角田 1991：51-52)。実は、この角田(1991)の説明は、「格体制を変更させる」存在様態文の「眼前描写文」の性質と関係があると考えられる。それゆえ、眼前描写文は、「ガ」格によって表されるのであろう。

そして、この久野(1973)のガ格助詞用法の定義により、前節で言及した福嶋(2006)の名詞句階層の高い階層に位置する名詞がガ格名詞となりやすい現象を詳しく説明することができる。ここで、もう一度福嶋の例文を参照されたい。

(6)　今彼の前を、勝子の手を曳いて歩いている**信子は**、家の中で肩縫揚げ

doi:10.6342/NTU201703274

のしてある衣服を着て、足をにょきにょき出している彼女とまるで違っておとなに見えた。その隣に**姉が**歩いている。

(7) 堤防の上には**避難民が**たくさん歩いていた。**僕は**能島さんが足ばやに歩くので、咽が渇くし足は痛いし、どうにもついて行けなくなった。

例(6)において、本来名詞句階層の高い階層に属している「姉」は、「ガ」格によって中立叙述の対象となり、「ハ」格で表される主題の「信子」によって背景化されている。そして例(7)では、「堤防の上には」という場所を強調する表現を使用している。これは存在文と同様の表現方法である。これは福嶋の言う「格体制を変更させる」という現象とは違うが、下線の文は「格体制を変更させる存在様態文」であるため、背景にある名詞がガ格で表され、「格体制を変更させる存在様態文」の「存在面」と「眼前描写文」の性質が際立っているように見える。

以上のように、名詞句階層の高い階層にある名詞は、「ガ」格によって背景化されるということが分かった。そしてそれを裏付けるかのように、ガ格の用法自体にも、その「格体制を変更させる存在様態文」の「存在性」を提示している。

4.3 まとめ

本章では、名詞の側面から「格体制を変更させる存在様態文」について議論した。

まずはガ格名詞の傾向から、ガ格名詞の生物性について分析した。BCCWJ で

doi:10.6342/NTU201703274

収集した例文を観察した結果、「格体制を変更させる」存在様態文のガ格名詞の多くは動物名詞、あるいは植物名詞に偏っているとわかった。この特徴をSilverstein の名詞句階層の概念で説明すると、ガ格名詞は動物名詞、無生物名詞[10]など、階層の中で比較的低い階層に属する名詞であると分かる。その傾向を「格体制を変更させる存在様態文」の「静態面」から見ると、階層が低ければ低いほど、「静止的な風景描写」の対象として描写されやすいと言える。つまり、「静態面」が引き出されることによって、ガ格名詞の名詞句階層における所属階層が下がり、「静止的な風景描写」になるわけである。

名詞句階層における階層の高い名詞がガ格名詞になる例文も見られるが、それを角田(1991)がまとめた名詞句階層の概念によって説明すると、ガ格名詞に対する話し手の関心が他の名詞より低いため、高い階層に位置する名詞にもかかわらず、背景化されることがあると判明した。また、ガ格助詞の用法が「中立叙述」であるため、「格体制を変更させる存在様態文」の眼前描写文の性質、そしてその静態的な「静止面」が際立っていると説明することができた。

本章では、ここまで述べてきたように、名詞の側面から「格体制を変更させる存在様態文」を見た場合、ガ格名詞は「静止的な風景描写」の対象として、その存在が背景化される。さらにガ格助詞により、「格体制を変更させる存在様態文」における「眼前描写文」の性質と、その「存在面」が表現されることを解明した。

[10] 前述したように、植物名詞は文法的に見ると、無生物名詞とは同じような性質を持っているゆえ、無生物名詞に分類されている。

doi:10.6342/NTU201703274

第 5 章　動詞の側面から見る「格体制を変更させる存在様態文」

本章は、動詞の側面から、「格体制を変更させる存在様態文」について分析したい。どのような動詞が、「格体制を変更させる存在様態文」の述語として使用される傾向が強いのかという点を、福嶋が提示した研究の手がかり、そして今回 BCCWJ で収集した例文に基づいて、議論を進めたい。

5.1 福嶋(2004)における手がかりと問題点

福嶋(2004)は調査結果から「格体制を変更させる存在様態文」の特徴、そして今後の研究の手かがりとして、以下のように述べた。

> ～テイル形をとって格体制を変更させている動詞は、自動詞に偏っている。他動詞は、～テイル形をとって格体制を変更させることが難しいようである。
>
> (福嶋 2004：97)

これに関して、福嶋は以下の例文を挙げ、さらに言及した。(福嶋 2006：116)

(1)a　池に鯉が泳いでいる。

(1)b*　食堂に太郎がご飯を食べている。　[動作継続]

(2)a　冷蔵庫にビールが冷えている。

(2)b*　572 号室に窓が開いている。　[結果継続]

doi:10.6342/NTU201703274

上の例文(1)(2)を見ると、「格体制を変更させる」現象のある動詞は、確かに自動詞に偏っているが、全ての自動詞において「格体制を変更させる」現象が必ず起きるわけではなく、「格体制を変更させる」現象が起きない自動詞もあることが分かる。

シテイル形式による「格体制を変更させる」現象は、シテイル形式のアスペクト的意味が、「動作継続」と「結果継続」の両方意味している場合とも起きる現象であり、現状の研究成果だけでは説明ができない。その他、動詞に関しては、自動詞と他動詞の違い以外にも、他の異なる視点からの考察が必要であると福嶋はかつて指摘したことがある。

本論文は、前述した福嶋の指摘を踏まえて分析を行いたい。

一方、福嶋(2004)は、シテイル形式のアスペクト的意味が、動作継続を表すものなのか、あるいは結果継続を表すものなのかの違いは、当現象に影響を与えないため、動作継続の文と結果継続の文とを特に区別せずに文の分析を行うと述べた (福嶋 2004：95)。ただし、このような方針で文の分析を行うことには疑問が生じる。

前章でも触れたように、福嶋によると、「池に鯉が泳いだ」という文は不自然であるが、「泳ぐ」をシテイル形式に変更することで、存在文と同じような「～ニ～ガ～イル/アル」の語順が成り立ち、静態的な「存在」の意味が強調される。つまり、「池に鯉が泳いでいる」という一文には、「鯉が泳いでいる」という「動作継続の動態面」と「池に鯉がいる」という「存在的な静態面」の二つの側面が存在していると言える。

上記のことを考慮すると、「池に鯉が泳いでいる」という文は、動態面を有し

doi:10.6342/NTU201703274

ているのに対し、「庭に犬が死んでいる」という文は、結果の存続を表すため、動態面を有していない文と見なされるべきであろう。

言い換えると、動作継続文は「格体制を変更させる」という文法的なプロセスを通して、「存在的な静態面」を前景化させるということである。それに対し、結果継続文はそもそも動態的な面を有していない上に、静態的な結果存続を表しているため、静態面をわざわざ前景化させる必要はないのであろう。以上のことから、筆者は動作継続文と結果継続文それぞれでは、「格体制を変更させる」目的が違うのではないかと思い、福嶋(2004)の動作継続文と結果継続文の両方を区別せず、同様に扱うという方針には疑問を感じる。

したがって、次節からはまず収集された BCCWJ の例文に基づき、「格体制を変更させる存在様態文」の動詞の傾向について説明する。さらに、例文を動作継続文と結果継続文に分け、例文の分析から、動作継続文と結果継続文それぞれの「格体制を変更させる」というプロセスを実行する意味を考えてみたい。

5.2　動詞の傾向

5.2.1　自動詞に偏る動詞傾向

まず、前章でも提示した例文とともに、BCCWJ の例文から、動詞の特徴を観察する。

(3) 「ああ。ほら、雪ですよ」王子が窓を指さした。みんな眠りからさめたみたいに、椅子を鳴らして立ちあがり、窓辺に集まった。闇の中に粉雪

doi:10.6342/NTU201703274

が**舞っている**。窓からこぼれるあかりに照らしだされて、まるで白馬の群れが駆けぬけてゆくようだ。

(辻原登『翔べ麒麟』)

(4) こちらは少し歩いたところで撮りました。他所のお庭なんですが通りからこんな風に見えるんです。素敵でしょう！？左が【伊呂波紅葉（いろはもみじ）】、右が【柿（かき）】です。左上に椋鳥が**飛んでいる**のがわかりますか？柿の実を何羽かでついばんでいましたよぉ～。これはとても不思議でした。【蔦（つた）】の赤と緑どうして部分的に紅葉しているのでしょうねぇ。 (Yahoo!ブログ)

(5) 門を入ると、一気に全体が見渡せてしまう。池とそれに沿った茶色い土の道と芝生が単純簡明にレイアウトされていて、それで終りである。平凡といえばこの上なく平凡、大胆というか、呆気ないというか…。短かく刈られた緑の芝生の上に、頭のてっぺんの赤い鶴が**歩いている**。かんがえごとをしながら、かなり広い池の縁を歩き、裏門から外へ出る。そこも旭川で渡し舟がある。有料である。向う岸に着くと、そこは烏城だ。 (吉行淳之介『一病息災』)

(6) 「よく解りましたね。おまえさま」「この河岸を塒にしている源太を知っているだろう。この前船で送ってきた男さ」宗右衛門は話を替えた。「よく河岸へ川の流れを見に行きました。まだおかみにならない時分、子供が川を見るのが大好きで、浅瀬に小さいお魚が**泳いでいる**のを見に行きますと、源太さんがいましたよ」宗右衛門は口をきゅっと閉じて顎を引いた。顎の下の肉がぶくぶくとふくれたさまは蛙の顎を思わせた。 (梅本育子『桃色月夜』)

doi:10.6342/NTU201703274

(7) 谷中のネコは太りぎみまずは「ネコ好きの聖地」と呼ばれる、東京の下町・谷中に行ってみた。なぜ聖地なのかというと・夏目漱石が『我輩は猫である』を書いた家があるから・本物のネコもいる猫グッズ専門店「ねんねこ堂」があるから。しかしなんといっても一番の理由は・町にネコが**うろついている**からだろう。谷中にいると、どこかの飼いネコの散歩によく出くわす。ネコを飼うにも、散歩に出すにもいい環境なんだろう。 (大塚幸代『大人の自由研究』)

(8) 途中、区画整理で道を造っている造成地を抜けるのですが、そこの両側の一面に秋桜が**咲いています**。ちょうど今日くらいが見頃かなぁ。よく観るといろんな色の秋桜が咲いていますね。それに香りも好い！クルマや自転車じゃ絶対に気づかないですね。

(Yahoo!ブログ)

(9) ある日のこと、森のずっと奥のほうまで入ったぼくらは、爆弾が空けた一つの大きな穴の縁に、一人の兵士が**死んでいる**のを見つけた。兵士の五体はまだ揃っている。両眼だけが欠けている。カラスの仕業だ。ぼくらは、彼の銃と弾薬と手榴弾を取る。銃は柴束の中に紛れさせ、弾薬と手榴弾は籠に入れて茸で覆う

(アゴタ・クリストフ(著)/堀茂樹(訳)『悪童日記』)

(10) 灯を入れた三畳の間に向かい合うと、八重はさらに痛々しく見えた。ふっくらとした頬と白髪交じりの髪が不釣合いで、優しさに溢れていた眼は暗く沈んでいる。貧病に疲れ果てて、心にもゆとりはないようだった。茶を運んでくるときにちらりと見えた隣室は空いていたが、その向こうの部屋に病人が**寝ている**らしく、八重は家中の襖を閉め

doi:10.6342/NTU201703274

てから茶をすすめた。　　(乙川優三郎『蔓の端々』)

以上の例文内の動詞は、全てが自動詞であり、福嶋(2004)の指摘した通り、「格体制を変更させる存在様態文」においては、自動詞がより頻繁に使用される傾向にあると思われる。この点に関し福嶋(2004)は、この特徴はあくまでも相対的なものであり、他動詞の例が全くないとは言えないと述べた。しかし、実際のところ、今回の調査においても、「格体制を変更させる存在様態文」の例文には他動詞の例は見つからなかった。なぜこのような結果になったのかに関して、次節ではその理由について論じる。

5.2.2　自他動詞の違い―主体・客体の観点からの動詞分類

工藤(1995)は、完成性、継続性というアスペクト的意味の対立から、動詞の語彙的意味のタイプ別に、次のような動詞分類を行った(工藤 1995：69-80)。

(A)　外的運動動詞—開ける、切る、食べる、死ぬ、結婚する等。

(B)　内的情態動詞—思う、考える、感じる、見える、疲れる、痛む等。

(C)　静態動詞—ある、いる、存在する、そびえている、優れている等。

外的運動動詞は、モノの動態的な運動の様子を表す動詞であり、現代日本語の動詞の大部分がこのタイプに属している。さらに、このタイプを「動作」か「変化」か、「主体」か「客体」かという観点で下位分類を行った。

doi:10.6342/NTU201703274

(A.1)　主体動作・客体変化動詞—開ける、折る、消す、倒す、曲げる、入れる、並べる、抜く、出す、運ぶ、作る。

(A.2)　主体変化動詞—行く、来る、帰る、立つ、並ぶ、開く、折れる、消える、曲がる、入る、出る、太る、就職する。

(A.3)　主体動作動詞—動かす、回す、打つ、蹴る、押す、食べる、見る、言う、歩く、泳ぐ、走る、泣く、飛ぶ、揺れる。

(A.1)主体動作・客体変化動詞とは、主体の視点からは動作、客体の視点からは変化を表す他動詞である。(A.2)主体変化動詞には、主体の変化・動作を表す動詞、人の意志的な変化動詞(あがる、かがむ)、モノの無意志的な変化動詞(死ぬ、腐る、冷える) などがある。(A.3)主体動作動詞には、動作のみを捉える動詞を指す。主体動作・客体動き動詞(動かす、飛ばす)、主体動作・客体接触動詞(打つ、蹴る)、人の意志的動作動詞(踊る、泳ぐ)、モノの非意志的な動き(光る、輝く)などがある。

前節で「格体制を変更させる」現象文に用いられる動詞は自動詞が多いと述べたが、その自動詞を上記の工藤(1995)の動詞分類に基づき、さらに詳しく考察すると、「舞う」「飛ぶ」「歩く」「泳ぐ」「うろつく」「咲く」「死ぬ」「寝る」といった、主体の状態、主体の動作のみを捉える動詞に偏っていることは明らかである。この点に関しては、先行研究でもすでに多くの先学が言及しており、今回の BCCWJ の調査でも同様の結果であった。その理由として、主体の動作と状態のみを捉える動詞は、客体の動作や状態変化を捉える必要がなく、静止的な景色として描写するのがより容易なためであると考えられる。つまり、主体の動作と状態にしか焦点が当たっていないため、福嶋の言う「格体制を変更さ

doi:10.6342/NTU201703274

せる」というプロセスが実行されても客体には影響がなく、「存在的な静止面」として文を解釈できるのである。それに対して、主体動作・客体変化動詞は、主体からも客体からも、「動作の過程」に焦点が当てられる動詞である。主体からは動作の過程、客体からは動作の働きかけによる変化が捉えられる。そのため、静止的な景色として描写することが困難となり、たとえ描写したとしても、不自然な文となってしまうのであろう。

以下では、上述した主体の動作と状態のみを捉える動詞が、シテイル文においてどのように存在様態を表すのか、またいかにして「格体制を変更させる」というプロセスを実行するのかについて分析する。

5.3　動作継続文における「格体制を変更させる存在様態文」

本節では、BCCWJ で収集した例文の中から、動作継続文に属する例文を選別、分析したい。本来は「動作の継続」を表す動作継続のシテイル文が、「格体制を変更させる」というプロセスを通じ、いかにシテイル文の「静態的な存在面」を前景化させるのかということについて説明する。

まずは、BCCWJ で収集した動作継続文の例文を参照されたい。

(3) 「ああ。ほら、雪ですよ」王子が窓を指さした。みんな眠りからさめたみたいに、椅子を鳴らして立ちあがり、窓辺に集まった。闇の中に粉雪が**舞っている**。窓からこぼれるあかりに照らしだされて、まるで白馬の群れが駆けぬけてゆくようだ。

(辻原登『翔べ麒麟』)

doi:10.6342/NTU201703274

(4) こちらは少し歩いたところで撮りました。他所のお庭なんですが通りからこんな風に見えるんです。素敵でしょう！？左が【伊呂波紅葉（いろはもみじ）】、右が【柿（かき）】です。左上に椋鳥が**飛んでいる**のがわかりますか？柿の実を何羽かでついばんでいましたよぉ～。これはとても不思議でした。【蔦（つた）】の赤と緑どうして部分的に紅葉しているのでしょうねぇ。 (Yahoo!ブログ)

(5) 門を入ると、一気に全体が見渡せてしまう。池とそれに沿った茶色い土の道と芝生が単純簡明にレイアウトされていて、それで終りである。平凡といえばこの上なく平凡、大胆というか、呆気ないというか…。短かく刈られた緑の芝生の上に、頭のてっぺんの赤い鶴が**歩いている**。かんがえごとをしながら、かなり広い池の縁を歩き、裏門から外へ出る。そこも旭川で渡し舟がある。有料である。向う岸に着くと、そこは烏城だ。 (吉行淳之介『一病息災』)

(6) 「よく解りましたね。おまえさま」「この河岸を塒にしている源太を知っているだろう。この前船で送ってきた男さ」宗右衛門は話を替えた。「よく河岸へ川の流れを見に行きました。まだおかみにならない時分、子供が川を見るのが大好きで、浅瀬に小さいお魚が**泳いでいる**のを見に行きますと、源太さんがいましたよ」宗右衛門は口をきゅっと閉じて顎を引いた。顎の下の肉がぶくぶくとふくれたさまは蛙の顎を思わせた。 (梅本育子『桃色月夜』)

(7) 谷中のネコは太りぎみまずは「ネコ好きの聖地」と呼ばれる、東京の下町・谷中に行ってみた。なぜ聖地なのかというと・夏目漱石が『我輩は猫である』を書いた家があるから・本物のネコもいる猫グッズ専

doi:10.6342/NTU201703274

門店「ねんねこ堂」があるから。しかしなんといっても一番の理由は・町にネコがうろついているからだろう。谷中にいると、どこかの飼いネコの散歩によく出くわす。ネコを飼うにも、散歩に出すにもいい環境なんだろう。　　(大塚幸代『大人の自由研究』)

「舞う」「飛ぶ」「うろつく」、そして福嶋(2006)の研究内でも登場した「歩く」「泳ぐ」という動詞は、実は、言語学研究会(1983)『日本語文法・連語論』の中の「移動性の自動詞」という点で共通している。

連語論では、動詞と名詞は特定的な文法関係で結びつき、動詞を核とする「連語」が形成されると提唱されている。連語論でいう「連語」とは、陳述的なものではなく、支配する単語と、支配される単語との文法的関係によって形成された組み合わせであって、複合的な単位になっている(方 2002：55)。言い換えると、連語における名詞と動詞との組み合わせは、特定の文法関係によってその結合性が高くなっている。そしてそれぞれの連語は、その核となる動詞の語彙的意味を、名詞との「結びつき」を通し、より具現的に表している。ただし、連語になることのできる語は限られている。

今回、例文の中から抽出した「舞う」「飛ぶ」「うろつく」「歩く」「泳ぐ」という動詞は、連語論の中では「ヲ格の空間名詞」と結びつく場合が多いとされ、「ヲ格空間名詞+移動性の自動詞」という連語を成すと言える。

次節では、このような「ヲ格空間名詞+移動性の自動詞」という連語における動詞が、なぜ動作継続の存在様態文の述語になりやすいかという点をさらに詳しく説明する。そのためにまず連語論を要約し、そこから「ヲ格空間名詞+移動性の自動詞」という連語が形成される意味を説明する。そして、連語論を参考

doi:10.6342/NTU201703274

に「ヲ格の空間名詞+移動性の自動詞」という連語と動作継続の存在様態文との関連性について詳しく説明したい。

5.3.1　連語論における移動性を表す自動詞

連語とは、従属的な関係で結びついた、二つあるいは三つの単語の組み合わせのことである。そしてそれぞれの連語には、軸となる主要な単語があり、その単語に、別の単語が隣接することによって、従属的な結びつきができあがっている(言語学研究会 1983：11)。

日本語の連語における被修飾語は、名詞である場合と、動詞である場合、そしてさらに形容詞である場合と、大きく 3 パターンに分類される。そして、それぞれのパターンが独自の連語論的体系を成している。例えば、被修飾語が動詞、修飾語が名詞である連語は、以下のような体系を成している。

名詞と動詞との組み合わせ

ヲ格の名詞+動詞

ニ格の名詞+動詞

ヘ格の名詞+動詞

デ格の名詞+動詞

ト格の名詞+動詞

カラ格の名詞+動詞

マデ格の名詞+動詞

(言語学研究会 1983：13)

doi:10.6342/NTU201703274

これは被修飾語の動詞の動作が、修飾語であるそれぞれの格の名詞によって表された何らかの客体との間で、関係が成立していることを意味する。例えば、ニ格の名詞が存在動詞や認知動詞、出現動詞などと組合わさると、修飾語の名詞は「モノのありか」を示し、修飾語の名詞と被修飾語の動詞の間に「ありかの結びつき(関係)」を成立させる。連語論内でのいわゆる結びつきとは、被修飾語の語彙的な意味が、修飾語によってより一層具体化されるということであり、逆に、被修飾語の語彙的な意味が修飾語を要求するとも言える。そしてまた、何のルールもなく単に被修飾語と修飾語が組み合わさるのではなく、修飾語になる単語は、しっかりと何らかの文法的なルールに従い、核となる被修飾語と組み合わさるのである。なお、連語を形成するさい、被修飾語、及び修飾語になれる語彙は、文法的関係によって制限されている。

今回の調査で収集された例文中の動詞「舞う」「飛ぶ」「うろつく」、そして福嶋(2004)が分析した「歩く」「泳ぐ」といった動詞は、連語論の中では「移動性の自動詞」として扱われている。連語論では「空間名詞+移動性の自動詞」において、それぞれ異なる移動動詞に同格の空間名詞が組み合わさった場合、それぞれの移動動詞に共通の性質を与えるとされる。例えば、「行く」「来る」「登る」などの移動性自動詞は、ニ格の空間名詞と組み合わさると、「目的地の結びつき」を形成し、「行く」「来る」「登る」などの移動性自動詞が「方向性」という性質を有するようになり、「方向性の移動動詞」という点で共通するようになる。これら「方向性の移動動詞」とへ格の空間名詞と組み合わさると、「行く先の結びつき」を作ることができ、マデ格の空間名詞と組み合わさると、「到着の範囲の結びつき」を作ることができる。

doi:10.6342/NTU201703274

しかし、「歩く、泳ぐ、飛ぶ」などの移動性自動詞はニ格、へ格の空間名詞と組み合わされなく、ヲ格の空間名詞と組み合わさることが多い。それはこれらの移動性自動詞は、目的地への動作よりも、移動動作の形態あるいは「様態」を示すという共通の側面を持っているからである。（方 2002：2）ヲ格の空間名詞と組み合わさると、その動作はヲ格が示す場所における移動様態を表すことができる。

連語論は以上のような考え方で、移動性の自動詞を「方向性移動動詞」「様態性移動動詞」「通過動詞」「出発動詞」の四種類に分類し、それぞれの動詞がニ格、へ格、ヲ格、カラ格、マデ格といった空間名詞と様々に結びつく。今回本論で扱う「舞う」「飛ぶ」「うろつく」「歩く」「泳ぐ」などの動詞は、上述の「様態性移動動詞」に属している。

5.3.2　移動動詞における様態性

連語論によると、ヲ格の名詞と組み合わさらないという点が、自動詞の特徴である。しかし、移動性の自動詞はその特徴に当てはまらない(言語研究会 1983：138-139)。移動性の自動詞は、空間を表すヲ格の名詞と組み合わさって、空間的な結びつきを成す。被修飾語の動詞が移動動作、そして修飾語の名詞はその移動動作が行われる場所を示す。

さらに、場所と移動動作の関係には、以下の下位分類がある。

(イ)　うつりうごくところ

(ロ)　とおりぬけるところ

doi:10.6342/NTU201703274

(ハ)　はなれるところ

(言語研究会 1983：140)

「歩く」「泳ぐ」「飛ぶ」「うろつく」「舞う」などの動詞は、例えば「鳥が空を飛ぶ」のように、移動動作を「様態」という観点から捉え、修飾語の名詞が、上の分類の(イ)の「うつりうごくところ」を表す。宮島(1994)は、その移動の様態を「移動法」と呼び、それらの動詞が「移動」を表す動詞というより、「移動法」を表す動詞と呼ぶほうが適していると指摘した。つまり、この類の動詞は、「行く」「来る」などの方向性を示す方向性自動詞のように、目的地・到着点を表すニ格、ヘ格の名詞を限定するのが難しく、目的地・到着点への移動という動作ではなく、ある範囲内での移動動作の形態を様態的に捉えるという点が、その語彙的意味に合致する。その「様態性」を描写する観点から、「歩く」「泳ぐ」「飛ぶ」「うろつく」「舞う」などの移動動詞は前節でも言及した「様態性の移動動詞」に属しており、ヲ格の空間名詞と組み合わさると、「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」の連語を成している。

さらに、「歩く」「泳ぐ」「飛ぶ」「うろつく」「舞う」などの動詞からなる連語は、単なる「空間+動作」という組み合わせではなく、移動動詞の語彙的意味が名詞の空間を要求しているのである。つまり、空間を表す名詞は移動動作を表す動詞にとって、必要不可欠な要素なのである。「空を飛ぶ」、「町を歩く」、「川を泳ぐ」などの連語における結びつきの性質は、単に空間的ではなく、対象的でもある(言語研究会 1983：143-144)。言い換えると、ヲ格が示す空間は、動作が成立するために必要な対象であり、ヲ格はデ格に言い換えることはできない。

ここまでの論述をまとめると、「歩く」「泳ぐ」「飛ぶ」「うろつく」「舞う」な

doi:10.6342/NTU201703274

どの動詞からなる連語には以下のような重要な特徴がいくつか見られる：

(a) 被修飾語の移動性自動詞は、様態的に動作を捉えるゆえ、「様態性の移動動詞」に属している。

(b) その「様態性の移動動詞」は、ヲ格をとる空間名詞と組み合わさり、「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」という連語を作り出し、ある範囲内の移動動作の形態を様態的に示す。

(c) ヲ格名詞と移動動詞との関係性は対象的であり、ヲ格が示す空間は、動作が成立するために必要な対象であり、ヲ格はデ格に言い換えることはできない。

なぜ「歩く」「泳ぐ」「飛ぶ」「うろつく」「舞う」などの動詞は、動作継続の存在様態文の述語になりやすいのかという疑問について、上で言及した「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」の連語の特徴から、その疑問を解決する。「歩く」や「飛ぶ」などの移動動詞は動作を描写するものの、これらが描写するものは、「動作そのもの」というより、「動作の様態性（動いている様子）」である。つまり、「食べる」のような、動作が何らかの客体に与える作用を描写する動詞とは違い、これらは主体自体が持続する動作の様態だけを表す動詞である。それゆえ、「静態面」の存在への許容度が比較的高く、「静態面」を前景化させやすいものと考えられる。

さらに、ヲ格の示す空間は動作が成立するために必要不可欠な要素であることは、「主体の存在する場所」[11]を重要視する存在様態のシテイル文との接点と

[11] 前章で述べたように、存在様態のシテイル文におけるニ格名詞は、「動作が行われる場所」ではなく、「主

doi:10.6342/NTU201703274

もなっている。

なお、上の論述により、移動性の自動詞と他動詞間での違いを説明することができたと思われる。次の例文でさらに深く考えてみたい。

(8a)　??鯉が泳いだ。

(8b)　池に鯉が泳いでいる。

(9a)　拓也がご飯を食べた。

(9b)　*食堂に拓也がご飯を食べている。

(8a)内の動詞「泳ぐ」は「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」という組み合わせを成す動詞であり、本来であれば動作が行われる空間を要求する。しかし(8a)内では、動作空間が欠落しているため、不自然な文となっている。それに対して、他動詞の「食べる」は動作が行われる空間を要求する動詞ではない。そのため、(9b)のように動作空間を示すと、かえって不自然な文となってしまう。

さらに、移動動作が行われる空間が要求されるということは、その動作を行う主体の存在する空間も同じく要求されると言えるであろう。したがって、(8b)のような「格体制を変更させる存在様態文」では、動作を行う主体の存在する空間がニ格で示されている。それに対して、(9a)の「食べる」は、動作が行われる空間を文の構成要素として要求しない。そのため、(9b)のように、主体の存在場所をニ格で示すと不自然であり、存在様態文に言い換えることはできない。

ここまで論じてきた内容から、次の結論を導くことができる。

体が存在する場所」を表すということを、再びここで強調する。

doi:10.6342/NTU201703274

動作継続文において、存在様態文における静止的な場面が表される場合、「鳥が空を飛んでいる」というような「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」という連語により構成される動作継続文が、存在様態のシテイル文に変更されやすい。また、「様態性の移動動詞」は本来「動作の様態性」を捉える自動詞であるため、「ある場所に主体がある様態で存在している」という「存在的静態面」を引き出すことがより容易である。

さらに、「様態性の移動動詞」にとって、文を成立させる要素としてヲ格空間名詞は必要不可欠であり、動作を存在様態として捉えることのできる空間、そして動作を行う主体が存在する空間がともに求められる。これらの自動詞は、存在的静態面を前景化させるために、格体制変更のプロセスを実行する。そして、本来はヲ格で示す移動動作の空間を、主体とその移動動作の様態の存在場所を示すニ格に変更させることで、「格体制を変更させる」現象が起こった存在様態文を作り出す。

本来「主体の動作の動態的継続」を描写する動作継続文は、上のプロセスを通して、「主体の動作の様態的存在」を表現する存在様態を表すシテイル文として成立することが可能なのであろう。

5.4　結果継続文における「格体制を変更させる存在様態文」

前節で論じた「ヲ格空間名詞+移動性の自動詞」という連語から作り出される「格体制を変更させる存在様態文」における動詞は、自動詞である一方、ほとんどが継続動詞である。そのため、もともと動的な動作の継続を表す、つまり「動態的」な動作継続文は、格体制変更のプロセスを通して、「静態的」な存在

doi:10.6342/NTU201703274

側面を前景化させ、いわゆる存在文と同じ文型の存在様態文を成立させる。このような「格体制を変更させる」存在様態文では、文における「動作継続の動態面」と「存在的な静態面」が同時に認められる。しかし、厳密に言うと、その「動作継続の動態面」は希薄化されており、「静的な存在意味」がより強調されている[12]。

しかし、結果継続文は動作継続文とは違い、「結果の存続」を表すため、そもそも「動的な動態面」を有してない。すなわち、動作継続文における存在様態のシテイル文が、格体制変更のプロセスを通して「動的な動作」から「静的な存在」に焦点を移すのに対して、結果継続文における存在様態のシテイル文は、初めから「静的な結果の存続」を表すため、静態的な側面を引き出す必要がない。両者間では、格体制変更によってもたらされる効果が異なるため、前述したように、福嶋(2004)の動作継続文と結果継続文の両方を区別せず、同様に扱うという方針には疑問を感じる。

さらに、今回 BCCWJ から収集した例文と福嶋(2004)が考察した例文を見ると、結果継続文の存在様態のシテイル文の述語となった動詞には、以下のような傾向があることが分かる。

(8) 途中、区画整理で道を造っている造成地を抜けるのですが、そこの両側の一面に秋桜が**咲いています**。ちょうど今日くらいが見頃かなぁ。よく観るといろんな色の秋桜が咲いていますね。それに香りも好い！クルマや自転車じゃ絶対に気づかないですね。

(Yahoo!ブログ)

[12] 様態の存在を強調するために、静態面が強調されるという。

doi:10.6342/NTU201703274

(9) ある日のこと、森のずっと奥のほうまで入ったぼくらは、爆弾が空けた一つの大きな穴の縁に、一人の兵士が**死んでいる**のを見つけた。兵士の五体はまだ揃っている。両眼だけが欠けている。カラスの仕業だ。ぼくらは、彼の銃と弾薬と手榴弾を取る。銃は柴束の中に紛れさせ、弾薬と手榴弾は籠に入れて茸で覆う

(アゴタ・クリストフ(著)/堀茂樹(訳)『悪童日記』)

(10) 灯を入れた三畳の間に向かい合うと、八重はさらに痛々しく見えた。ふっくらとした頬と白髪交じりの髪が不釣合いで、優しさに溢れていた眼は暗く沈んでいる。貧病に疲れ果てて、心にもゆとりはないようだった。茶を運んでくるときにちらりと見えた隣室は空いていたが、その向こうの部屋に病人が**寝ている**らしく、八重は家中の襖を閉めてから茶をすすめた。 (乙川優三郎『蔓の端々』)

(11) 庭に犬が**死んでいる**。(福嶋 2004:99)

(12) 冷蔵庫にビールが**冷えている**。(福嶋 2004:116)

これらの例文を見る限り、用いられた動詞はいわゆる瞬間動詞が多い。これらの瞬間動詞はどのような場合において、格体制変更のプロセスによって「格体制を変更させる存在様態文」を構成することができるのであろう。そして、瞬間動詞から成立する「格体制を変更させる存在様態文」には、どのような意味が秘められているのであろう。これらの問題を解明するために、まずは瞬間動詞によるシテイル文のアスペクト的意味から説明したい。そして、そのシテイル文のアスペクト的意味と「格体制を変更させる存在様態文」との間の関連性について考える。

doi:10.6342/NTU201703274

5.4.1 「瞬間動詞+シテイル」動詞文のアスペクト的意味

金田一(1950)は、アスペクトの観点から日本語の動詞を「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」の四タイプに分類した。その中で、「継続動詞」と「瞬間動詞」に属する動詞は大半を占めている。継続動詞とは、明確に動作・作用を表す動詞であり、その動作・作用は一定時間続けて行われるという特徴を有する動詞のことである。一方、瞬間動詞とは、同じく動作・作用を表す動詞ではあるが、その動作・作用は一瞬で終わってしまうという特徴を有する (金田一 1976:10)。ここで強調したいのは、一つの動詞がこの四タイプの内のどれか一つだけに属するわけではないということである。実際に、二つ以上のタイプに属する動詞も非常に多い。例えば、以下の例文の中の、

(13) あの人の本の読み方の早いのには驚いた、今読み初めたと思ったらもう読んでいる。 (金田一 1976:11)

「読む」は継続動詞に分類されるが、ここでは「読み終る」の意味で、瞬間動詞的に使われている。つまり前後の文脈によって、動詞を臨時的に他のタイプの動詞として使用することが可能なのである。この点について、まず確認したい。

今回の調査では、結果継続の場面における存在様態のシテイル文の述語となった動詞は、ほとんどが「寝る」「咲く」といった動詞である。このような動詞は、動詞の語彙的意味に基づき分類すると継続動詞に属するが、「格体制を変更

doi:10.6342/NTU201703274

させる」存在様態文においては、瞬間動詞と見なすことができる。

さらに、金田一(1955)は、このような動作・作用が起こって一瞬で終わる瞬間動詞と「シテイル」が組み合わさると、「以前の動作・作用の結果が現在まで残っている」というアスペクト的な意味を発揮することを発見した。そして、それはつまり瞬間動詞と「シテイル」によって、「何かがとある状態にある」ということが表現されているので、いわば「ある」の一種であると述べた。(金田一1976:29) 。

以上の金田一の説明から考えると、結果継続の「格体制を変更させる存在様態文」は、実は「主体がある結果が継続している状態にある」ということを表しており、主体と結果の両方の存在を示している。それはいわゆる存在文の意味に大変近く、結果継続文が存在文の一種とも言える可能性を示唆している。

次節では以上の論説を踏まえて、結果継続の「格体制を変更させる存在様態文」について、例文をもとに更なる分析を行う。

5.4.2 「結果の存続」を表す「格体制を変更させる存在様態文」

結果継続文において格体制変更のプロセスが実行されることは、一体どのような意味があるのであろうか。これを説明するために、ここでまずもう一度福嶋(2004)の例文を見てみる。

(14)* 池に鯉が泳いだ。／○ 池に鯉が泳いでいる。 [動作継続]

(15)* 庭に犬が死んだ。／○ 庭に犬が死んでいる。 [結果継続]

doi:10.6342/NTU201703274

(14)では、「池に鯉が泳いでいる」の「鯉が泳いでいる」という「動的動作面」と、「池に鯉がいる」という「静的な存在面」が同時に認められる。これに対し(15) の、「庭に犬が死んでいる」はそもそも「動的動作面」を有しておらず、金田一(1955)が述べたように「犬が死んだ」という「以前の動作・作用の結果が現在まで残っている」というアスペクト的な意味を表している。つまり、「犬」が「死んでいる」というのは「何かがある状態にあること」を意味するものであり、静態的な「状態の存続」として表現されている。この観点をもとに、動作継続文が「格体制を変更させる」存在様態文へ変化するさいの格体制変更の目的が、文の焦点を「動態的な動作」から「静態的な存在」へと移行することであると考えることが可能である。このことから、動作継続文と結果継続文における「格体制を変更させる存在様態文」の目的は、明らかに異なったものであると言えるであろう。

では、なぜ結果継続文の「格体制を変更させる存在様態文」にも格体制変更のプロセスが起きるのか。この問題を明らかにするため、再び福嶋(2004)の例文を起点に考える。

「庭に犬が死んだ」という文が不自然な理由は、恐らく「死んだ」というところにあるであろう。「犬が死んだ」という文は、その動作が起こった瞬間を描写した文である。すなわち、「動作」が発生した「瞬間」を捉えた文であり、動作にのみ焦点を当てている。このような文は、「動作を捉える文」と言える。このような文において、モノの存在場所を表す二格によって場所を示すと、不自然な文となることはすでに指摘されている(定延 2004:181)。しかし、存在文に似た「庭に犬が死んでいる」という文は結果継続文のアスペクト的意味、あるいは「結果存続の様態」を表現するにあたり、格体制を変更するプロセスが実行

doi:10.6342/NTU201703274

されている。そのため、二格によって場所を示すのである。

第 2 章で言及した結果継続文と存在文の類似性から、さらに詳しく言及すると、格体制を変更するプロセスを通して、「犬が死んだ」という本来の文を「格体制を変更させる存在様態文」に「変更する」と言うのは適切でないと思われる。なぜなら、結果継続文はそもそも存在様態文の一種であるため、そのような瞬間動詞による動作が起きたあとの結果存続を初めから「格体制を変更させる存在様態文」で表す傾向があると考えられるからである。

今回収集した BCCWJ の例文でも同様に、「格体制を変更させる存在様態文」を用いて、その結果の存続を表していることが確認できる[13]。

(8) 途中、区画整理で道を造っている造成地を抜けるのですが、そこの両側の一面に秋桜が**咲いています**。ちょうど今日くらいが見頃かなぁ。よく観るといろんな色の秋桜が咲いていますね。それに香りも好い！クルマや自転車じゃ絶対に気づかないですね。

(Yahoo!ブログ)

(9) ある日のこと、森のずっと奥のほうまで入ったぼくらは、爆弾が空けた一つの大きな穴の縁に、一人の兵士が**死んでいる**のを見つけた。兵士の五体はまだ揃っている。両眼だけが欠けている。カラスの仕業だ。ぼくらは、彼の銃と弾薬と手榴弾を取る。銃は柴束の中に紛れさせ、弾薬と手榴弾は籠に入れて茸で覆う

(アゴタ・クリストフ(著)/堀茂樹(訳)『悪童日記』)

[13] 例文(8)(10) の「咲く」「寝る」はもともと継続動詞である。しかし、前後の文脈から判断すると、金田一(1950)が述べたように、ここではそれら動詞の動的な過程が表現されているのではなく、動作の結果が表現されている。このことから、ここでは瞬間動詞として使用されていると言える。

doi:10.6342/NTU201703274

(10)　灯を入れた三畳の間に向かい合うと、八重はさらに痛々しく見えた。ふっくらとした頬と白髪交じりの髪が不釣合いで、優しさに溢れていた眼は暗く沈んでいる。貧病に疲れ果てて、心にもゆとりはないようだった。茶を運んでくるときにちらりと見えた隣室は空いていたが、その向こうの部屋に病人が**寝ている**らしく、八重は家中の襖を閉めてから茶をすすめた。　(乙川優三郎『蔓の端々』)

例文(8)(9)(10)中の下線部の「格体制を変更させる存在様態文」は、いずれも静止的な風景の描写として述べられている。さらにこれらの文では、焦点が本来の「動態的な描写」から「静止的な存在」へと移行されており、「静止的な結果存続」による風景の描写として述べられている。

5.5　まとめ

本章では動詞の側面から「格体制を変更させる存在様態文」について論じた。主に福嶋(2004)で提示された調査の手がかり、及びその調査方針に関する疑問に基づき、実例分析を行った。そして、動作継続文と結果継続文による「格体制を変更させる存在様態文」内において使用される動詞についての考察を行った。

動作継続文による「格体制を変更させる存在様態文」に関する考察結果として、動作継続文による「格体制を変更させる存在様態文」内で使用される動詞には「移動性の自動詞」が多いこと、そしてそれら移動性の自動詞は、動作の様態を捉える「様態性の移動動詞」でもあること、また連語論的には、「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」という連語が形成されることが判明した。

doi:10.6342/NTU201703274

さらに、連語「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」が「移動動作の様態性」を捉えることから、「鳥が空を飛んでいる」のような動作継続文は、「格体制を変更させる」プロセスを通し、「空に鳥が飛んでいる」のような「格体制を変更させる存在様態文」になることが容易であると判明した。また、連語「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」における「ヲ格空間名詞」は文を成立させる上で必要不可欠な要素であり、ヲ格によって動作様態の空間と動作を行う主体が存在する空間がともに示される。しかし、「格体制を変更させる存在様態文」に言い換えられた場合、ヲ格に代わりニ格によって、その動作様態と主体が存在する空間が示されることが判明した。

一方、結果継続文による「格体制を変更させる存在様態文」内で使用される動詞には、瞬間動詞が多いことが判明した。「瞬間動詞+シテイル」形式が、「以前の動作・作用の結果が現在まで残っている」、つまり「何かがある状態にあることを表す」というアスペクト的意味を含むことから、瞬間動詞からなる「格体制を変更させる存在様態文」は、実は「主体がある結果が継続している状態にある」という「結果の存続」を表しているということも判明した。以上のことから、動作継続文と結果継続文では、同様のプロセスで「格体制を変更させる存在様態文」へと変更されるものの、その目的は全く異なっているということも判明した。

doi:10.6342/NTU201703274

第 6 章　結論と今後の課題

6.1　本論文のまとめ

本論では、福嶋(2004)が提唱した文の「格体制を変更させる」現象から、「格体制を変更させる存在様態文」について論じてきた。そして、コーパスから収集した実例を分析することによって、様々な観点から「格体制を変更させる存在様態文」に関する文法・文脈的特徴を明らかにした。結果として、「格体制を変更させる存在様態文」は存在文の一種であり、そして文の中では「静止的な風景」を描写する機能を有することが判明した。以下では、本論の考察内容を要約する。

第 2 章では、福嶋(2004)が提唱した「格体制を変更させる」現象、そして「存在様態を表すシテイル文」と関連のある先行研究について振り返った。シテイル形式に関する研究は、それまで杉本(1988)をはじめに、アスペクトの観点からの研究が主流であった。しかし岡(1999)と野村(2003)は、シテイル文を一種の「存在文」であるという観点から、シテイル形式が表す意味を論じてきた。福嶋(2004)はそれらの先行研究を踏まえ、語順の傾向から「格体制を変更させる」現象が起こっているシテイル文は、「存在様態を表すシテイル文」の一種であると指摘した。しかし、語順だけで説明できないものがあると判明したため、語順以外の観点から「格体制を変更させる存在様態文」について検討すべきであると筆者は考えた。

第 3 章では、まずニ格の「存在的用法」を確認することによって、「格体制を変更させる」存在様態文における「存在的な静態面」について論じた。「格体制

doi:10.6342/NTU201703274

を変更させる」存在様態文のニ格がデ格に変換できない理由は、「存在文における静態面」にあると思われる。つまり「格体制を変更させる」というプロセスを通して、その「存在的静態面」が前景化され、本来の「動態的動態面」が背景化されるのである。そのため、「格体制を変更させる存在様態文」が静止的な存在文として見なされるのである。

同時に、「N1 ニ N2 ガ V テイル」の語順における N1 と N2 との制約についても確認した。N1 は N2 が違和感なく存在できる場所でなければならないと同時に、一種の風景のように N2 は N1 において、静止に近い状態でいなければならないという制約が存在する。

第 4 章では、福嶋の調査方法を模倣して、国立国語研究所の BCCWJ 言語コーパスを使用し、実例を収集し、それら実例に対し簡単な考察を行った。詳しい考察に関しては、次章より行った。

第 5 章では、名詞の側面から「格体制を変更させる存在様態文」について論じた。BCCWJ の例文を考察した結果、「格体制を変更させる存在様態文」内で使用されるガ格名詞は動物名詞、あるいは植物名詞に偏っていることが判明した。そして、なぜこのような傾向があるのかに関して、名詞句階層の概念で説明をした。そこでは、文の「存在的存在面」が引き出されるにつれて、ガ格名詞の生物性がより低く捉えられ、「静態的な風景描写」の対象になりやすいと説明した。つまり、名詞句階層が低ければ低いほど、「格体制を変更させる存在様態文」のガ格名詞になりやすいということである。

高い階層がガ格名詞になる例もあるが、それらガ格名詞は話題の焦点ではない場合がほとんどである。話題の焦点ではないということはつまり、話し手のそれらのガ格名詞に対する関心の度合いは低いということである。関心の度合

doi:10.6342/NTU201703274

いが低いものは文において背景化されやすく、そのため「静止的な風景描写」の対象として見なされやすいのである。

第 6 章では、主に動詞の側面から「格体制を変更させる存在様態文」について論じた。また動詞は、動作継続文における動詞と結果継続文における動詞に区別し分析を行った。

動作継続文の「格体制を変更させる存在様態文」内で使用される動詞には「様態性の移動動詞」が多く、連語論の観点からは「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」の連語を成していることが判明した。「様態性の移動動詞」は「動作の様態」を捉えるという性質を持つため、連語「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」からなる動作継続文は、「格体制を変更させる存在様態文」として見なすことが可能である。さらに、連語「ヲ格空間名詞+様態性の移動動詞」における「ヲ格空間名詞」は文を成立させる上で必要不可欠な要素であるが、「格体制を変更させる存在様態文」に言い換えられた場合、ヲ格に代わりニ格によって、その動作様態と主体が存在する空間が示されると説明した。

結果継続文の「格体制を変更させる存在様態文」内で使用される動詞には「瞬間動詞」が多いことが判明した。そして、「瞬間動詞+シテイル」形式の有するアスペクト的意味から、瞬間動詞からなる「格体制を変更させる」存在様態文は「ある動作の結果が継続している状態」、つまり「結果の存続」を表していると説明した。

改めて本論文の論点をまとめると、福嶋(2004)が提唱した「格体制を変更させる」現象を含むシテイル文は、確かに野村(2003)の提唱した「存在様態を表すシテイル文」の一種である。しかし、福嶋(2006)は主に語順の観点から論を進め、「格体制を変更させる」存在様態文における、文法・文脈的特徴については明

doi:10.6342/NTU201703274

示していない。さらに、語順の観点から説明できない例もいくつか存在するため、本論文は他学者による先行研究と福嶋(2004,2006)の考察結果に基づき、福嶋(2004,2006)の考察結果に関する問題点について、構文全体の表す意味、そして文中で使用される名詞と動詞の側面から、「格体制を変更させる存在様態文」について考察を行った。本研究を通し、「格体制を変更させる存在様態文」の文法的意味、文脈的特徴、そして文中で使用される名詞と動詞の特徴などを明らかにすることができた。

6.2　今後の課題

本論文は主に、福嶋(2004,2006)の「格体制を変更させる」現象、そしてそれに関する問題点に着眼し、「格体制を変更させる存在様態文」について論じた。本研究は今後、従来とは異なった観点からのシテイル形式に関する研究を促進する良いきっかけになると考えられる。しかし福嶋(2004,2006)の説に拘泥しすぎたため、実例収集のさいに多くの例文が除外された。また、実例文の中には分析が不十分で、今後更なる詳しい分析が必要な例文も多数ある。

したがって、今後は統括的に「存在様態文」の本質について把握できるよう、岡(1999)、野村(2003)の視点に基づき、さらに考察を進めたい。例えば、野村(2003)にも出現した「裏庭に人が立っている(野村 2003：3)」「ここには骨も埋まっているんだし(野村 2003：4)」など、「格体制を変更させる」現象が起こっていないものの、「存在様態を表すシテイル文」に属している文について分析を行いたい。「存在様態文」、そして「存在様態を表すシテイル形式」を、一種の上位概念として、研究を進めたい。

doi:10.6342/NTU201703274

参考文献　(五十音順)

井島正博(2005)「変化動詞文の格構造」『日本語学論集 1』東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室

伊東朱美(2015)「日本語の移動変化動詞と場所格交替」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 41』東京外国語大学留学生日本語教育センター

伊藤健人(2003)「動詞の意味と構文の意味--「出る」の多義性に関する構文文法的アプローチ」『明海日本語 8』明海大学日本語学会

角田太作(1991)『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語—』くろしお

金杉高雄・岡智之・米倉よう子(2013)『認知日本語学講座 7　認知歴史言語学』くろしお

金田一春彦(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト–現代日本語の時間の表現–』ひつじ書房

久野暲(1973)『日本文法研究』大修館

國廣哲彌(1981)『日英語比較講座第 3 巻　意味と語彙』大修館

言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房

定延利之(2004)「モノの存在場所を表す「で」？」『柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお

鈴木亨(2011)「複合的変化事象の意味論に向けて:状態変化と位置変化が両立するとき」『山形大学人文学部研究年報 8』山形大学

中右実・田中茂範・松本曜(1997)『空間と移動の表現』研究社

野村剛史(2003)「存在の様態—シテイルについて—」『国語国文』72 巻第 8 号京都大学

方美麗(2002)「「連語論」<「移動動詞」と「空間名詞」との関係>--中国語の視点から」『日本語科学 11』国立国語研究所

福嶋健伸(2004)「現代日本語の～テイルと格体制の変更について」『實践國文學 65』実践女子大学

----------(2005)「無いはずのニ格句が有る不思議—格体制と～テイル—」『國文學 解釈と教材の研究』51 巻第 4 号　學燈社

----------(2006)「動詞の格体制と～テイルについて—小説のデータを用いた二格句の分析」『現代日本語文法現象と理論のインタラクション』

doi:10.6342/NTU201703274

ひつじ書房
松下大三郎(1896)「動詞の自他被使動の研究」須賀一好他編『動詞の自他』ひつじ書房
宮島達夫(1994)『語彙論研究』むぎ書房
森田良行(1980)『基礎日本語 2—意味と使い方』角川書店
森山新(2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』ひつじ書房

コーパス資料

国立国語研究所「中納言」コーパス
https://chunagon.ninjal.ac.jp/auth/login?service=https%3A%2F%2Fchunagon.ninjal.ac.jp%2Fj_spring_cas_security_check

国立国語研究所「少納言」コーパス
http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/

doi:10.6342/NTU201703274